悪者たちのぶつくさ３　続編　改！

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪者たちのぶつくさ３　続編　改！

【Ｎコード】
Ｎ６３４８Ｅ

【作者名】
ｉｍａｉｗａ

【あらすじ】
悪者たちのぶつくさ2色々編、悪者たちのぶつくさ3の続編になります。登場人物○勇者Ａ：主人公○プル：勇者Ａの飼ってる魔物○タケシ：プルと同じ○シギト：勇者Ａの友人&勇者Ａの勤める会社の社長さん○シルディ：シギトの魔物○熊五郎：シギトの魔物○ゾル：シギトの魔物○ソリア：シギトの魔物○フィーネ：この会社の事務。

出勤前の朝！（前書き）

前の書き方につまらなさを感じましたので
ちょっと変えてみました。
こちらの方がやる気でそうなので、試しに書いて見ます。文字数が
増えるので、
少し前より展開と更新が、遅れるかもしれません。
これまでの話は　悪者たちのぶつくさ２　色々編　と　悪者たちの
ぶつくさ３
に収録されています。

出勤前の朝！

太陽の光がアパートの窓を透して、部屋全体を照らすと
リンは瞼を震わせながら、目を徐々に開いていく。

「は～良くねたわ・・」

上半身を起こすと、右手で目を擦りながら、左手を口に当て生欠伸をした。
そして、勇者Ａの寝ている横顔を優しい眼でそっと見つめる。

（・・・・・良く寝てるわ）

（・・・・・疲れているのね）

「さーってと、朝ごはん用意しなきゃ・」

リンはそう言うと、布団をめくり起き上がると
ネグリジェを脱ぎ捨て、私服に着替え始める。

白い花柄模様の服に、薄い青の膝丈まであるスカートに着替え終わると
エプロンを頭から掛ける。
そして、窓に近付き、カーテンの先を指先で軽く開くと外の様子を眺める。
眼下には日の光を浴びて、後方の荷台を覆う白い布が、まぶしく光る馬車が
目に飛び込んでくる。

（・・・・プルちゃんに餌あげないとね）

「あ・・そうだ・・・・・　」

昨日帰ってきたタケシの存在に気がつくと、リンは額をぽんと手で叩いた。

（・・・タケシちゃんも、あの中にいるんだった）

（・・・・タケシちゃんに岩も持っていってあげないとね・・）

リンは薄いピンクのカーディガンを着ると、台所に足を運び
冷蔵庫を開くと、骨つきの鶏の肉を取り出した。
それを、予め用意している皿にのせ、台所の隅に置かれているお盆に載せた。

「さてと・・次はタケシちゃんのも・・」

昨日、散歩の途中で、近くの岩場でとってきた岩石が、玄関の布の袋に入った状態で
置かれている。
リンは鳥の肉を載せたお盆を、器用に左手に乗せると
玄関までやってきて、右手で岩の入った袋の先を絞るようにして持ち上げる。

「重いわ・・」

「ふー」

「ガチャ」

一度岩の入った袋を地面に置くと、ドアの鍵を回し、足で蹴ってドアを
大きく開ける。そして、右手にまた岩の袋を持つと、アパートの廊下を
ふらふらした足取りで歩いていき、階段を慎重に下りていく。
なんとか、馬車の前まで、バランスを保ちながらやって来ると
袋を置き、馬車の外から、プルたちに呼びかける。

「プルちゃん～、タケシちゃん、ご飯よ～」

その声を耳にすると、馬車に寝ているタケシが最初に反応した。
寝ている間タケシは、体を丸い岩に完全に代えて眠っている。
その岩から音を立てて右手が伸び始める。

「ガガガガ」

「ガガガガ」

同じ調子で、順番に左手、右足と体がどんどん形成されていき
最後にまるで亀が頭を甲羅から出すように、頭が胴体から飛び出る。
目の光が怪しく赤く光ると、重い体を起こして立ち上がる。

「リンさん、おはよ」

「あ・タケシちゃん、おはよ～」

「ご飯持ってきたわよ！」

「おお、ありがと！」

タケシは馬車の後方にある、出口の布のチャックを開けると
ゆっくり右足から降りる。そしてリンの前に立つと、右手で頭の後
方を摩りながら
朝ご飯を持ってきてれくれた、リンに感謝の言葉を伝えた。

「ガラ、ガラ～」

その場に座り込み、タケシはリンに貰った岩を口に頬張ると
噛み砕いて内部に押し込んでいく。その行為の間に口から粉砕され
た岩が
音を立てて零れ落ちる。

「うん、うまい！」

リンはタケシの横にかがむと、タケシが美味しそうに食べるのを、
優しい笑みを浮かべながら見つめる。

「さーってと、プルちゃんも起こさないとね」

「プルちゃん～起きて～」

「ぷるちゃん～」

リンが近所の迷惑にならない程度に、馬車の中へ声を透すが
一向に反応が帰ってこない。

「俺が起こしましょうか？」

「あ、お願いできる？」

「任せてください！」

「奴の起こし方はコツがいるんですよ」

タケシはリンに微笑むと立ち上がり、後部から馬車に入っていった。

プルはゼリー状の体を平らにして、馬車の中で鼾をかきぐっすり、寝ている。

「さーてっと・・・・・」

「起きろ！プル！」

「・・・・・・」

「コラ、起きろってば・・」

タケシは少し声を張り上げ、足でプルの体を踏みにじりながら起こそうとするが全く反応しない。

「このやろう・・」

「やるしかないか・・」

タケシは眼を赤く光らせると、次の瞬間、人差し指から炎を軽くだすと

ゼリー状のプルの体に指先の炎を当てる。

「ん・・・？なんだこの背中のやけるような熱さは・・」

「うわ・・あちちち！」

プルはあまりの熱さに、ピョンと飛び上がり
馬車の天井に頭を打った。その後も中でピョンピョン跳ね回っている。
タケシはそのプルの動きを見切ると、触覚を掴んだ。

「こら・・プル」

「お前、相変わらず、寝相悪いな・」

「あんまり、リンさんに迷惑かけるなよな」

タケシが眼を赤く光らせ、プルに呆れた顔で、説教し始める。

「てめぇ！やりやがったな！」

「あん？俺とやる気か？」

「久しぶりにやってやるよ！」

プルがタケシに飛び掛ると、タケシもそれに応戦して
馬車の中で二人とも暴れまわる。
馬車の外側に張られてる布が、タケシの体の一部や
プルの体が接触するたびに、一定のリズムで盛り上がる。
それを見たリンは、二人がケンカしてるのを悟ると
大きな声で外から怒鳴りたてた。

「やめなさいーーーー！！」

「ケンカはだめー！」

そのリンの大きな声に、タケシとプルは体をびくつかせると、ケンカをやめる。
さっきまでの白熱したバトルに終止符が打たれた。

「もう～、二人とも仲よくしてよ～」

「あ、勇者A起こさないと・・」

リンは顔に苦笑を浮かべながら、左手の時計を見ると
勇者Aの出勤時間が迫っている事に気づく。

「じゃ、私、勇者A起こしてくるから」

そう言うとリンは、お盆を手にもち、アパートの自室へ
早足で帰っていった。

リンは勇者Aを起こすと、テーブルに食事を並べ、二人とも席につくと
朝食を一緒に食べながら、朝の夫婦の会話を始めだす。

「勇者A、今日は何時に帰ってくるの？」

「さぁね～・・仕事内容によるんじゃないかな」

「会社勤めって大変だよね」

「まぁな～」

シギトの事務所に勤めるまでは、自由な孤高のハンターとして野に出て、プルと一緒に魔物を倒す事で生計を立てていた勇者Ａ。稼ぎは大したことは無かったが、狩りに行く時間、終わる時間全て自分の意思で決める事ができた。しかし、シギトの会社に勤める事で時間が制約されるため今までのような、適当な時間感覚ではやっていけないのである。その決められた時間形式に慣れるのに、勇者Ａはまだまだ苦労しそうだ。

勇者Ａはトーストを食べ終えると、手を合わせた。

「ごちそうさまーー！」

「じゃ～、リンいってくるね」

「うん、いってらっしゃーい！」

「ちゅ」

勇者Ａが外出を告げると、リンは優しく言葉を返し顔を近づける。後ろで両手を組み、軽く目を閉じると、少しカカトを浮かし
勇者Ａの右頬に軽くキスをした。

勇者Ａは靴を履き、布のバッグを方からぶら下げると玄関を出て、見送るリンに、振り返りながら右手を上げて微笑む。

勇者Ａは馬車までやってくると、馬車の席に飛び乗り、馬に繋がれている
皮で出来た紐を手に手繰ると、後方に体を捩り、馬車の中にいるプルとタケシに声を掛けた。

「ほら、いくぞ！」

「プルププ（ヘイ！）」

「ラジャ！」

三人を乗せた馬車は、アパートの前の道を進んでいくと、右折し村の大通りに出る。その土と砂利が混じる道をまっすぐに進むと両側に木の柵がある出口が見えてきた。
馬車はその出口をあっという間に潜り抜けると
魔物たちがいる野に、風を伴い颯爽とくりだしていった。

出勤前の朝！（後書き）

多少強引な終り方ですが、これで終わりとなります。
今まで読んでいただいた皆様有難うございました。

プライド！

勇者Ａ達を乗せた馬車は、途中、何度か野にいる魔物たちと、戦闘を交えながらも
オルカ村にある、有限会社「冥府魔党」の事務所の前に到着した。
勇者Ａの住むキル村の倍の大きさを誇るこの村は、インフラ整備が行き届いている。
地面は舗装されていて、コンクリートの道が多数を占める。
事務所の前は、この街一番の大通りとなっていて、人々の往行は盛んである。
大通りは歩道と馬車の走る道に分かれていて、歩道にはポプラの木が等間隔に植えられている。

事務所の玄関外は広い。石階段を上がると高級そうな石タイルが地面を隙間無く
埋め尽くし、入口のすぐ前には、大理石の大きな支柱が、人が楽に通れる空間を
真ん中に挟むように立ち、事務所から突き出た形の屋根を支えている。

「事務所はいるぞ」

「プルは魔物ルームに先に行ってくれ」

「俺はタケシを連れて、事務所に行ってくるから」

「ＯＫ！」

三人は入口で分かれると、右の従業員通路である細い道へとプルは入っていく。
その先には魔物ルームへの入口があるからだ。
勇者Ａとタケシは事務所の正面玄関の曇り硝子のドアを開けると、中に入っていった。

「おはよう、フィーネ」

「あらおはよ～、勇者Ａ」

玄関を入ると、受付テーブルがあり、そこには、この事務所で事務や接客応対を
一人でこなすフィーネが座っている。
肩まで伸ばした金色の髪に大きな瞳、近眼が少し入っているので
度がそれほどきつくないメガネをかけている。
清楚な感じを醸し出す年若い美系の女性。
彼女は、オルカ村に生まれた時から住んでいて、この事務所の長シギトとは
幼馴染である。フィーネの家の２軒隣にはシギトの家がある。
二人は子供の時から、良く一緒に遊んでいた。小学校、中学校は同じ学校に
通っていた。その縁もあって、シギトはこの事務所を開く際、失業中の彼女に
声を掛け、事務として働いてもらっている。
フィーネと軽く話しをすると、勇者Ａはタケシを連れて奥のシギトのいる席にまで
やってきた。

「シギト、おはよ～」

「おはよ～、早いな」

通気性のある薄い生地の黒の長シャツを着たシギトが、足を組んで座っている。
木で出来た回転椅子に軽く腰を落とし、手を机で軽く組むと
勇者Ａとタケシを見つめている。

「あのさ～、シギト」

「何だ？」

「こいつ、タケシって言うんだけど」

「ちょっと前までいた、俺の魔物なんだけどさ」

「最近まで、行方不明になってて」

「昨日俺達の家を見つけて、帰ってきたんだ」

「で、よければ・・・」

青い眼でシギトはタケシをじっと観察している。勇者Ａはタケシを雇ってもらおうと
思ってはいるが、それは全てシギトの判断に委ねられている。金銭上の
事もあるので、少しシギトの顔色を伺い、言葉を抑えながら、自分の希望を暗にちらつかせる。

「言いたい事は分かる」

「その横にいるゴーレムを雇って欲しいんだな」

「そ・そうなんだけど・いいかな？」

「ふむ・・・」

シギトは頭に金銭的な事を計算にいれながら、タケシがどういう性格の魔物で
雇うだけの力量を備えたモンスターであるか、気になっている。
タケシを無言で食い入るように見つめると、何か頭に浮かんだのか、
眼をカッと見開くと口を開いた。

「勇者Ａの魔物だし、すぐにうちで働いてもらうのもいいが」

「俺は自分の眼で確かめた奴でないと、信用できないんだ。」

「一度そのタケシと戦わせてくれないか？」

「え・・・・？」

勇者Ａは思ってもいない、シギトの言葉に不意を付かれると
どう答えていいか迷い、横にいるタケシに目をやる。
タケシはしばらく、押し黙っていたが、やがて重い口を開き始めた。

「俺を試したいんですね？」

「そうだ」

「構いませんよ」

「じゃあ、事務所の裏にある広場に来てくれるか」

「分かりました」

「ちょ、ちょっと待てよ」

淡々と二人の間で交わされるやり取りに、勇者Ａは動揺を隠し切れない。

勇者Ａの慌てた様子に気遣うようにシギトは言葉を繋いだ。

「大丈夫！殺しはせん」

「タケシのハートと力量を試したいだけだ」

「本気は出さないさ」

「そ・・そうか？」

「それなら良いけど・・」

勇者Ａはシギトのその言葉にほっと息をつき安堵する。

しかし、シギトの眼にはその言葉とは裏腹に、本気で戦う決意が滲み出ている。

「じゃ行きますか」

タケシはそう言うと、手に握りこぶしを作ると、闘志を燃やしている。

勇者Ａが勤める事務所の長とは言え、知らない人間に戦いを挑まれたのだ。

・・・・・・・殺しはせん
・・・・・・・本気は出さない

このシギトの言葉が頭の中でぐるぐる回る。
多少腕に覚えのあるタケシは、プライドを傷つけられ
憤りを覚えている。

（・・・・・・ふ・・・その俺を見下ろした態度・・）
（・・・・・気にいらねぇ・・調子こきやがって・・）
（・・・・その天狗の鼻へし折ってやる・）

タケシは肩をいからせながら、シギトの後を付いていく。
勇者Ａはさっきまで、余裕をもって二人の様子を見ていたが
タケシから溢れる居様な気合を感じ取ると、不安がよぎり始める。

（・・・・大丈夫だろうか・・）
（・・・・無茶しなければいいが・・）
・・・・・・・・・・

「ま・・待てよ～俺も行く」

勇者Ａは少し気後れをしながらも、二人が先に行くのに気づくと
駆け寄り、二人の背中を見つめながら後ろについて歩く。
通り際にある廊下の窓から、裏庭の広場の芝生が激しく揺れている
のが見える。

（・・・今日は風が強いな・）

タケシｖｓシギト

「覚悟はいいか、タケシ」

「いつでも」

三人は裏庭へやって来ると、タケシとシギトが広場の真ん中辺りまで歩み
お互い体を向きあわせ、視線を合わせる。
勇者Ａは、戦いに巻き込まれない距離に場所を取ると、二人の様子を心配そうに
見つめている。

風の勢いは強く、芝生に生える草は波立つように右方向に流れている。
シギトは腰を低くし屈むと、地面の草を右手で毟り取る。
そして、体を起こして、タケシを青い眼で見つめると、言葉を発した。

「タケシ、俺が持っている草が、風に全て流された時」

「それが、戦いの合図だ」

タケシは静かに頷くと、じーっとシギトの持つ草の揺らぎを見つめている。

草が１枚、２枚と風の流れに乗ってシギトの指から離れていく。

最後の一枚が飛んでいった瞬間、二人は後ろに素早くバックステ

ップをして
距離をとり、構えを取る。
タケシは両足をがに股気味に開き、地面に踏ん張り少し屈むと
両手を肩幅より広く開き、頭の辺りまで持ち上げ、空気を掴むように指を形どり
シギトの動向を注視している。

シギトは居合い抜きの体勢から、踏ん張ってる左足で地面を強く蹴ると
タケシの間合いに一瞬で踏み込んできた。

・・・・・は・・はやい・・

タケシは瞬時に自分のすぐ前に、姿を現したシギトに面食らう。
次の瞬間、鞘から剣を高速で抜き取ると、そのままの速度でタケシに横から切りつける。

「く・・」

タケシは体を後ろに素早く仰け反らすと、高速の剣の軌道から体をかろうじて
はずし、回避する。

「ほ〜・・今のを良く避けたな・」

「意外と素早いじゃないか」

シギトの力量を今の攻撃で把握したタケシは、少し警戒気味に右足で地面を蹴って

後方にステップし距離を取る。

・・・・・やるな・・

だが・・・・・これからだ・・！

「うおぉお、くらえ、地走り！」

タケシは地面に右拳を叩き付けると、その凄まじい衝撃が地を裂きながら
砂煙を伴い、シギト目掛けて突っ込んでくる。

「ほぉ・・変わった技を使うな」

その衝撃が間近まで迫ってくると、シギトは自分の前に剣を突きたてた。
剣に衝撃が当たるとその威力は分散し、一方は岩を砕き、もう一方の衝撃が
勇者Ａに向かって突き進む。

「ええ・・・」

「ちょっと・・」

「く・・」

油断してた勇者Ａは、少し遅れて左に避けると、地面に背中から倒れこんだ。

「あ・あぶねぇなぁ・・」

その勇者Ａの声も二人の耳には入らない。それくらい二人は緊迫した戦いを続けている。

・・・・余裕こいてられねぇな・・

「タイタンソード・・」

タケシは右手が眩い光に包まれると、肘から手のひらを少し越えた辺りまでを
光の剣に変化させた。

「こっちからいくぜ・・」

タケシは一言呟くと、シギトへ向かって突進する。
右手のタイタンソードを振りかぶると、シギトに叩きつける。
シギトはそれを剣で受け止める。
それを気にもとめず、連続して右上方から、左から右から
あらゆる方向から剣を振るうが、シギトはその連続した剣撃をすべて
片手でいなす。

「ははは・やるな」

「だが、そのスピードでは俺に傷をつけることはできないぞ」

「何を!?」

タケシの渾身の連続攻撃を片手でいなしながら、冷ややかな微笑を
浮かべ余裕綽綽のシギト。

「剣とはこう使うんだ」

剣を交わすと、次の一撃が来る前に、シギトは高速で４回体に切りつけ
タケシに裂傷を負わせる。

「グワァ・・・」

タケシは傷を負うと後ろに下がり、左膝を地面につき傷を右手で押さえる。

・・・・・みえねぇ・・

・・・・・なんて使い手だ・

シギトは後ろに飛ぶと、左手の平で剣の切っ先を押さえ、左足を軸足に構える。

「俺の技も見せてやろう」

「無双流抜刀術　風裂剣！」

シギトの剣からカマイタチのようなものが、タケシめがけて放たれる。
カマイタチが放たれた瞬間、タケシは上空にジャンプしてそれを避ける。

「なに・・」

「オーラインパクト！！」

タイタンソードのオーラを拳に集中すると、上空から勢いをつけて地面に叩きつける。
その威力は凄まじく、爆風と土砂を周りに撒き散らせながら地面を掘り進む。辺りは砂煙で覆われ周りの視界を奪う。

「む・・・・く・・」

シギトはその爆風で、後方に弾き飛ばされるも右足で踏ん張り耐える。

「く・・・どこへ行った・」

シギトは砂煙と風の襲来に眼を開けられないでいる。眼の辺りに剣を持ってきて
向かってくる砂煙や小石をはじきながら、薄目をなんとか開けると、タケシのいる場所を探る。すると、砂煙の中に黒い影を見つけた。

「そこだー！」

その姿を目で捉え高速で踏み込むと、途中で左足で地面を蹴りジャンプし
黒い影に向かって上から切りかかる。

「もらった・・」

「！？」

「なんだ・・この手ごたえは・・」

切り込んだ黒い影が砂煙が晴れるに従って姿を表す。

「これは・・土人形・・？」

後方からタケシの声が、シギトの耳に入る。

「ひっかかったな・・」

タケシはシギトを後ろから羽交い絞めにすると、そのまま上空に大きくジャンプする。

「なに・・」

「く・・・動けん」

「くらえ・・地獄落とし！！！」

空中で反転すると、そのままシギトを頭から地面に落とそうとした。

「く・・こいつは・・・」

「離せ・・」

「離すもんか・・」

空中でもみ合いながら、二人は地面に向かって急降下していく。

「やむおえん・・」

シギトがそう言った次の瞬間、体全体が光輝いたかと思うと、タケ

シが弾き飛ばされ
地面に激突した。
シギトは空中で回転すると、ふわっと地面に着地した。

「ぐ・・・・」

タケシの胸には無数のひび割れが入って、大きなダメージを受けている。

・・・なんだったんだ・・今の技は・・

一瞬の出来事でシギトに何をされたのか理解できないでいる。
しばらくして、視界が薄暗くなるのを感じると、その場で前のめりに倒れ気絶した。

「俺をここまで追い詰める奴がいるとはな・・」

「ここまで本気にさせたのは、ソリアとゾル以来だな・・」

シギトは気絶したタケシを見つめながら、敗者に最大の賛辞とも取れる言葉を送る。

「タ・タケシ〜！大丈夫か・・」

勇者Ａは血相を掻いて、タケシの元に駆け寄る。

「おい、しっかりしろ！」

「タケシ！」

「勇者Ａ、心配ない、致命傷には至っていないはずだ・」

「シギトやりすぎだぞ・・！」

「う・・すまん・・・」

「シルディに回復させよう」

シギトは少し申し訳なさそうな表情を浮かべ、勇者Ａに謝ると
左肩で勇者Ａ、右肩でシギトがタケシ支えるように立ち上がらせ
二人で魔物ルームへバランスをとりながら、歩いていった。

タケシ目覚める！

「逃げろタケシ！」

「父さん！そんなことできないよ・」

「いいから、逃げろ・・・」

「このマーキュラスはもうもたん・・」

「俺達の分も生きて、向こうの世界で幸せに暮らすんだ・・」

「父さん・・いやだよ」

・・・・・そんなのいやだよ・・

・・・・・・・・・・父さん・・

・・・・・・・・

「タケシ！」

「タケシ大丈夫か？」

・・・・・・ん？

「う・・・・」

「お、目覚めたぞ」

タケシは瞼を照らす電光の明るさと、自分の名前を呼ぶ数人の声に、意識をとりもどすと
少しずつ、ぼやけた視界を、しっかりしたものに代えるように意識を集中し始めた。

「む・・・・ここは・・」

タケシの目に初めに飛び込んできたのは、自分を心配そうに見つめる勇者Ａの姿だった。

「お、タケシ・大丈夫か？」

「俺は・・・一体・・」

「プルププ！（タケシしっかりしろ！）」

「お前はシギトとの戦いで酷い傷を負ったんだよ」

「だけど、もう大丈夫だ、シルディが回復魔法で、治してくれたよ」

・・・・・そうか・・

・・・・・シギトって奴と戦って俺は敗北したんだな・・

タケシは視界がはっきりしてくると、周りの様子を観察し始める。
熊の姿をした魔物、人間の女の子、プル、そして勇者Ａ。
４人が自分を覗き込むように、上から見下ろしていた。

「タケシ、良く頑張ったな」

「シギトがぜひうちに、来て欲しいって言ってくれたよ」

「・・・・・・・」

・・・・・・く・

・・・・・素直に喜べねぇな・・

・・・・・・やっぱり悔しいぜ・

・・・・・・かなり追い詰めていたのに、最後のあの技は一体・・

タケシはシギトが最後に放った技に、何か記憶の片隅に残る
過去に体験したものの中に、類似するものがあるきがしてならなかったが、
あまりに曖昧でぼやけたものなので、その引っかかりを、
頭に浮かび上がらせることを中断した。

「タケシ・かな？」

「私、シルディよ」

「貴方を治療しました。」

「今日から貴方は私達の仲間よ」

「よろしくね！」

そうタケシに声を掛けてきたのは、優しい目でどこか無邪気な笑みを浮かべる
小柄な女の子である。髪は栗色で長髪、金色の目、白いブラウスに、短い栗色の布生地のスカートを体に身につけ、小さな木の靴を履いている。

「・・・・・・・」

「あら・・この子無口？」

「あぁ、ちょっとタケシは人見知りするかな」

「プル（そうかもな）」

「へ～かっこいいよね」

「顔の目の辺りとか、少しへこんで影になってて」

「その影から怪しく光る赤い目が、なんかかっこいいね！」

・・・・・かっこいい・・？

歯に衣を着せない、率直な感想を述べるシルディに
タケシは少し戸惑いながらも、不思議と他人を嫌な気持ちにさせない彼女独特の天然とも言える、開けっぴろげな物言いに、徐々に警戒心を緩めると
重い口を開き始めた。

「・・・えっと・・・」

「タケシです、シルディさん、よろしく・・」
「お・・よかった！嫌われたかと思ったわ」
「傷治してくれたそうで・・」
「ありがと・・」
「うん！よかったね！」
シルディは、あっけらかんと明るい口調で喋ると
無垢な笑みをを浮かべて、タケシの顔を覗き込んだ。
「俺は熊五郎だ！」
「これからお前は、俺達の仲間だ」
「何でも言ってくれ」
「ども・・・」
「しかし、シギトも手加減って奴を覚えない奴だな・・ハハハ・・・」
熊五郎は顔に苦笑を浮かべながらも、その喋りからは
豪快で頼りがいに満ち、前向きで、相手への気配りを忘れない堅実な性格が窺える。
茶色の布のふわっとしたズボンを履き、靴は履いていない。
上半身にも何も着ておらず、手に皮のバンドを巻いている。バンドには

金属の三角柱が等間隔に縫い付けられている。強そうな熊系モンスターだ。

「あ、そうそう！」

「タケシ！」

「・・へい」

「へいだって・・！」

「まぁいっか、あのね、私魔物だから勘違いしないでね！」

「人間じゃないよ！ほら！」

「え・・・？」

シルディは、そう言うと手に持っているステッキを、背中の辺りでふり
魔法で隠していた、透明の羽の姿を浮かび上がらせる。

「ね！？」

「ピクシーだよ！」

「ほぉ・・・なるほど・」

「あ、そそ、もうすぐ次の仕事の話があるから」

「タケシも来れば？もう傷は完治してるはずだし」

「そうだ、おめーも来いよ」

「プルププ（タケシもいこうぜ！）」

・・・・・・・

・・・・・・なんかここ・・温かいな・・

・・・・・・いつ以来だろ・・・

「行きます・・！」

タケシはここでなら、快適に勇者Ａやプルと思う存分戦い
仕事をこなせるような気がして、これから起こる出来事に、心躍らせている
自分に気づかずにはいられなかった。

打ち合わせ！

シギトたちは、今日の依頼案件のミーティングを会議室で始めている。
１２畳ほどのその部屋は、周りを防音効果のある壁で固めていて
長いテーブルに丸椅子が沿うように置かれ、白いボード
天井には長い蛍光灯が設置されている。会議に必要な物しか置かれていないようだ。

メンバーの中にはソリアの姿が見える。昨日の夜、シギトの頼まれごとを終え帰り
今日から仕事に参加している。

「さてと・・・」

「今日の案件の話をするぞ」

「今から話すのは、Ａ班が行く案件の話だ」

「Ａ班は勇者Ａ、プル、タケシ、シルディだ」

シギトは鉄の指示棒を、Ａ班に入る者に順番に向けていく。

「Ａ班のリーダーはもちろん勇者Ａだ」

「え・・？あ・・そうか」

その言葉に勇者Ａは一瞬戸惑うが、メンバーの顔ぶれをみて
人間が自分一人だということに気づいた。

・・・・だよな・・シギト覗いたら、俺一人だけが人間だしな・
・・・俺に全責任が掛かっている・・気合いれないと！
いつものメンバーにシルディが増えただけだが、シギトの会社で
初めてリーダーとして仕事を請け負う勇者Ａ、プレッシャーが肩に
掛からないわけが無い。
「オルカ村から、西の２０ｋｍの地点にあるゼル川に近くにある
コルク村・」
「そこに、最近魔物たちの集団が現れ、村の食べ物や金品を奪っ
ていくそうだ」
「村の人々に危害は加えないらしいが、こう毎回、物を奪われて
はな」
「そこでお前達に奴等の排除を頼みたい」
「なるほど・・」
「地味な仕事ね～・」
シルディはテーブルに頬杖をつきながら、今までの案件に比べて
見劣りする今回の仕事の内容を聞いて、落胆を表情に現している。
「ま、Ａ班の話はそれだけだ」
「街の大体の見取り図渡すから、確認してくれ」

「A班は出て行っていいぞ」

「あいよ～」

A班のメンバーは部屋を出た。

押し黙る勇者A達。

何から始めようか困惑気味の勇者Aを見て
シルディが最初に口を開いた。

「ねぇ、魔物ルームで話ししよっか」

「え？・・そ・・・そうだな」

「じゃ行こうか」

「ウス」

「プルププ（行くべ！）」

魔物ルーム入ると、この間、拾ってきたケルベロスが鼾を掻いて
寝ているのが見える。

この部屋はモンスター用に大きく敷地をとって作られてる。
この前まで、くすんだ青の壁に、テーブルと椅子しか置かれていな
かったこの部屋は
見違えるように変わっている。
壁には白の正方形のタイルが、隙間無く張られていて

奥の片隅に大きな冷蔵庫、物を入れるロッカー、窓には金色を縁取ったベージュのカーテン。
ガスコンロに水面台、壁には大きな地図、衣装箱を伴う大きな鏡、アンティーク風の長いテーブル、木の根っこのような椅子が見える。

「なんか、すげ～よな、この部屋」

「人間の部屋と変わらないじゃん」

昨日、勇者Aはタケシを運んだ時この部屋へやってきたが、あまり周りを見ていなかった。
よくよく見ると、部屋の中が充実している事に気づく。

・・・・俺達の家より、よっぽど立派・・

・・・・こんな部屋に住みたいなぁ・・

勇者Aはそんな事を考えながら、ふーっと息をついた。

「プルププ（これ全部シルディがやったんだよ）」

「そうなのよ！私がコーディネイトしたんだから！」

「ほぉ・・」

「結構苦労したんだから・・」

「あちこち雑誌みて、良い家具はないかとか探し回って」

「・・・・それで・・～」

「ストップ～！！！」

「仕事の話しおうか・」

女がデザイン系統の話しをしだすと、長くなるのはリンで体験済みなので

最初のうちに釘をさして、話を切り替える勇者Ａ。

難しい話は苦手なので、勇者Ａとシルディに全部任せて

窓から部屋の外をぼーっと見つめるタケシ。

外に植えられた綺麗な花に、止まる蝶々の動きを目で追っている。

プルは冷蔵庫を空けて、何か無いか物色していた。

そのたるんだ人任せの二人をみて勇者Ａが激怒した。

「てめーら・・・・・・」

「集まれよ・・・・・・」

「全部・・・俺任せに・・してんじゃねぇ・・」

勇者Ａの体にとてつもなく、ドス黒いオーラが集まり始める。

「う・・・」

「プルププ（はいはい！）」

異様な殺気を感じ取った二人が、急いでテーブルにつく。

・・・・相変わらず迫力あるなぁ・・勇者Ａ

しばらく勇者Ａから離れていたタケシは、久しぶりに見るその迫力に懐かしさすら感じていた。

・・・俺のマスターはこうでなくっちゃな・

「じゃ、地図渡すぞ」

「でな・・あーでーこーで」

・・・・・・・・・・・・・

村の場所や周辺の状況、中の見取り図などを、適当に説明する勇者Ａ

タケシは相槌を打ちながら真面目に聞いているが、プルは途中から眠たくなって欠伸をしている。

シルディは勇者Ａが仕事の話を、淡々と順序良く話す姿に、少し感心しながら見つめている。

・・・・勇者Ａってボケってしてるようで・・

・・・・リーダー向きな気がする・・よく見たら顔もかわいいし・

勇者Ａの顔をまじまじ見つめながら、今までの印象を少し上方に修正するシルディ。

「ま、大体こんなもんだ」

「じゃ、今日の昼飯くったら、コルク村に出発だ」

ケルベロスが、部屋の騒がしさに気づき、目を覚ますとシルディ達の近くまで歩いてくる。
大きな巨体のケルベロスにはこの部屋は少し狭そうだ。

「みんな～なんの話してるの？」

「ん・・？」

「プルププ（おはよ！）」

「仕事の話よ、ケルちゃん」

「ケルちゃん？」

「ケルベロスだからケルちゃんよ」

単純なシルディの命名に少し苦笑を浮かべる勇者Ａ

「明日、みんなで出かけるからお留守番しててね！」

「ええ・・寂しいよ～・おいらもついていく！」

「ええ・・？」

「だめよ、危険よ」

「行く～絶対いく～！」

体を右に左に揺らし駄々をこねるケルベロスに

困りが顔のシルディ。

「どうする・・？勇者Ａ」

「うーん、仕方ないな・・」

「でも、お前馬車に入んないから」

「歩いてこいよ！」

「うん、分かった！」

・・・・はぁ・・こいつ役にたつんかなぁ・・

・・・・足引張らなければいいけど・・

勇者Ａは、無邪気に笑顔を見せるケルベロスを、不安そうに見つめた。

コルク村到着！

勇者A達はコルク村へ出発するため、事務所の地下にある、馬車置き場にやって来た。

「さ～てと、おめーら、出発するぞ」

「どんどん、乗ってくれ」

「は～い！」

魔物たちが次々と馬車の入口から、順番に乗っていく。

「みんな乗ったな～」

「ケルは歩いていけよ」

「う～ん、なんか、中の方が楽しそうだなぁ・・」

ケルはそう言うと、少し俯き加減で目を閉じ、悲しそうな顔をしている。

「ごめんね、ケルちゃん」

「でも、あなたの巨体じゃとてもね～・・許してね」

シルディが慰めるように言った。

「う～ん・・・あ・・そうだ！」

ケルは何か思いついたように、突然顔を上げると生き生きした眼に変わった。

「アレを使おう」

「精霊魔法、メタモルフォーゼ」

ケルは何かの魔法を唱えると、突然体が光り輝いたかと思うと姿がだんだん収縮し、小さな人のような形に代わっていく。

「どう、これ！」

ケルは小さな男の子の姿に変身した。
Gパンに半そで、頭の真ん中には小さい角が一本生えている。

「ええ・・あなたも精霊魔法使えるの？」

「うん！」

変身系の魔法は精霊魔法にしかない高等魔法である。
極々一部の魔物しか使えない、その魔法をケルが使ったのを見てシルディは驚いている。

「ケルちゃんって・・もしかしてすごい魔物だったりして・」

「おぉ・・ケルすごいなぁ・・それなら乗れるな馬車に」

「プルププ（ケルやるな～ほら乗ってこいよ」

「うん！」

ケルは嬉しそうな顔で馬車に飛び乗る。

「よし、みんな乗ったな、じゃあ出発だ！」

馬車は勢い良く発車すると、コルク村向けて走り出した。

・・・数時間後

「お・・川が見えるぞ・大きな川だな」

「これがゼル川だな・・」

「涼しそう～」

川から吹き付けてくる冷たい空気が、馬車の中にも流れてくる。

「プルププ（気持ちいいなぁ・・）」

「お・・見えてきたぞ、村が」

村の入口には　↑コルク村と書かれた木の看板が地面に穿たれている。

馬車は入口を抜け、土の比較的平らに舗装されている道を進んでいく。

木でできた家が道沿いに何軒かあり、家の周りには、草木が生い茂り、綺麗な花も咲いている。

道沿いに木の柵があり、家の敷地と道路を分断している。

「ええっと・・依頼主の村長の家は・・・」

手書きで書かれた、簡単な地図を勇者Ａは、町と照らし合わせながら村長の家を特定し始める。

「あ、ここを右に曲がって三軒目が村長の家だ。」

「ここだ・・！」

村長の家は周りの家よりは、大きめで、丸太を幾重にも重ねて作られた
ログハウスのような外見の家だ。ステンドガラスの窓が光を浴びると７色に輝いている。

勇者Ａは馬の手綱を引き、馬車を家の前に止めると、馬車の中の魔物たちに呼びかける。

「着いたぞ～、おめーら、降りろ」

「プルププ（へい！」

「イエッサー」

馬車からみんな降りると、勇者Ａは魔物たちを馬車の外で待たせて一人で入口の前まで歩いていき、家をノックする。

「ちわーす！冥府魔党の勇者Ａといいま～す」

「誰かいませんか～？」

ノックするが、反応がない。

「あれ・・おかしいな・・」

「お～いもしもし～居留守ですか～」

ドカ！！

「ファイアボール！」

ドアが開いたかと思うと、中から突然炎の球が勇者A目掛けて飛んできた。

「げげ・・なんじゃ～～？」

勇者Aは不意をつかれ、まともに炎を受けた。

「あれ・・魔物じゃない・・」

「あちちちち！」

勇者Aは炎が服に燃え移り、その場くるくる回っている。

炎の燃え映った服を脱ぎ捨てると、勇者Aは剣をスラリと抜いた。

「てめぇ・・あちーじゃねーか・・」

「俺に・・何の恨みあるかしらね～が」
「ただじゃすまさねぇぞ・・」
「待て待て！話せば分かる・・」
勇者Ａの耳にはもはや何も聞こえない。
「プルププ（まずい、あのじ～さん・・やられるぞ・・）」
「間にあわねーな・・」
「プル・・体を貸せ・」
「プルププ（は・・？」
「ウリャ～～！」
勇者Ａはじ～さんに剣を振りかぶると、飛び掛った。
「プルボンバー！！」
タケシはすごい勢いで、プルの触覚を掴み振り回すと
勇者Ａ目掛けて投げつけた。
ドーーーン！！！
「ぐえぇえ・・」
勇者Ａの頭にプルが激突すると、ログハウスの壁に二人とも叩きつ

けられた。
じ～さんは頭を抱えると、その場で眼を閉じしゃがみこんでいる。
「間に合ったな・・ジャストミートだ・・」
コントロールの正確さに満足げなタケシ。
「ふ～助かったわい・・」
「プルププ（タケシ～・・・覚えてろよ・・）」
「ぐ～・・」
プルは頭にタンコブを作ると、タケシの方を恨めしそうに睨む。
勇者Ａは頭から壁にダイブして、目を回して、気絶している。
「なんか・・初めっから、大変なことになってるわね・・」
その様子を人事のように見つめるシルディ。
「怖いな・・この人たち・・」
ケルは少し怯えながら、体を震わせ、縮みこんでいた。

村の魔物

気絶した勇者Ａを村長は、自分の家の一室にあるベッドに寝かせた。
魔物たちも、勇者Ａと同じ部屋に招き入れられた。

「うう・・・」

勇者Ａが目覚めた。囲むように魔物たちがその動向を見つめている。

「プル（大丈夫か？）」

「あんたたちやりすぎなのよ」

「いやしかし・・あの場面は仕方ない・」

シルディのいちゃもんに、タケシは自分のやった事の正当性を主張する。

「済まなかったな・・勇者Ａさん」

「私はこの村の村長だ」

勇者Ａは起き上がると、村長の襟首を捕まえ振り回した。

「村長！？なんでいきなり俺襲うんだよ！」

「まぁまぁ落ち着いて・・」

勇者Ａの肩に手をおいて宥めるシルディ。

「ほんとにすまない・」

「だがわし達の我慢も限界だったんじゃよ」

「実力行使に打って出ようと、待ち伏せしてたら・・」

「君が偶然きてな、姿確認せず、攻撃してしまったんじゃ」

「確認しろよな・・！」

説明を聞いて、村長がわざとじゃないのが分かると
最後の言葉に残った怒りを込めると、勇者Ａは落ち着きを取り戻した。

「まぁ、俺達もあんたとケンカしにきたんじゃないんだ」

「話し聞こうか、村長さん」

「ありがと～・・」

村長はお辞儀すると、椅子を勇者のベッドの横に引っ張り、静かに
腰を下ろすと
最近村で起こっている事件を語り始めた。

「ワシらの村は、畑で農産物を自給自足で賄い」

「それで生活しとるんじゃ」

「だが、最近、どこからとも無く現れた魔物たちが」

「村の家々や、倉庫に貯められた食物を、少しづつだが」

「しばしば奪っていくようになっての」

「困っておる・・」

村長は眉毛を八の字にすると、顔を曇らせる。そしてまた話しを続けた。

「あいつらは、なぜかワシ達の隙をついて、こっそり家や倉庫に忍び込み」

「盗んでいく」

「強盗のように危害を加える事はないのじゃ」

「だから、ワシらも、中々奴等を捕らえることはできなくて」

「今日から、作戦を変えて、待ち伏せしとったんじゃ」

「ふ～ん、そいつら弱虫なの？」

勇者Ａは頭で村長の話しをまとめると、思ったことを素直に口に出した。

「いや・・そうでもないようだぞ」

「あいつらはチビデビルと言ってな」
「比較的魔法に長けた魔物たちじゃ」
「あの盗む手口からしても、統率がとれてて、頭も良さそうだし」
「ワシ達を襲って、全部巻き上げることも可能なのに」
「少しずつ、物を掠め取っていくのじゃ」
「それって・・ある意味賢くない？」
シルディが話しを聞いて、感じ取ったことを口にした。
「村長さんたち、怪我させたら、食物も作られないし」
「村人が襲われたら、警戒網も厚くするし」
「ちょっとずつ、長い時間かけて、掠め取るって賢いやり方だと思うわよ」
「じゃの～・」
「しかし、どうもそれが・・気になるんじゃ・・」
「果たして魔物たちが、そこまで計算だった動きができるものかと・・」
勇者Ａが冗談まじりに言葉を発した。

「そりゃ〜〜、シルディやタケシみたいな、頭の良い魔物が統率組んだら」

「できるんじゃないか？」

「プルとか、頭わりーから、無理だろうけど！」

「プルププ（頭悪くて悪かったな！）」

「何よ〜、私達なら泥棒はたらくっていうの！？」

「いや、例えさ・怒るなよ・」

シルディが眉根の間を縮めて、両手を腰にやり、詰め寄ってきたので両手のひらをシルディに向けて、諭すように言葉を返した。

「ご飯、ただで盗んでいくんだから、おいらなら許せないな。」

ケルが無垢な表情の中に正義感みたいなものを、にじませて言った。

「村長〜！」

「ガタ」

「ん？どうした？」

近くに住む村人が息をきりながら、慌てた素振りで村長の家に駆け込んできた。

「あいつらがまた倉庫に潜入しています」

「なに！？」

「む・・・みんな行くぞ！！」

「おう！」

「おっちゃん、案内してくれ！」

「あ、ああ」

勇者Ａは村人に案内を頼むと、村長の家を走り出て行った。

追跡！

勇者Ａ達は案内役の村人を乗せると、その指示に従ってチビデビルが、盗みをはたらいてる倉庫へと馬車を走らす。

「あそこです！」

倉庫の前に馬車を止めると、勇者Ａと魔物たちは外に飛び出て警戒気味に倉庫の様子を外から探る。
倉庫の中からは、色々な音が外に流れてくる。

「ドン、ズーズー、ガタガタ」

「おめーら、踏み込むぞ！」

「ちょっとまって！」

勇者Ａ達が踏み込もうとした瞬間、シルディが一言発した。

「どうした？シルディ」

「良いこと、思いついたわ」

「魔物たち、素早いから、たぶん逃げられるかもしれない」

「だから、そうさせないために、私達が入った後」

「すぐ入口に、魔法の障壁を私が張るわ」

「お、ナイスアイディーア！」

「プルププ（さすがシルディ、賢いな！）」

シルディの良い案に、笑顔を浮かべ褒め称える勇者Ａとプル。

「・・・・・そううまくいくかな・・・・」

タケシは対照的に、その案に疑わしい言葉を投げかけた。

「まぁ、いいじゃねーか、頼むわ、シルディ！」

「分かった！」

勇者Ａは静かに村人から借りた倉庫の鍵を、ドアの鍵穴に差し込むと静かに開けた。そして勢い良く中になだれ込む。

「貴様等～全員逮捕する～！」

勇者Ａは刑事ドラマの見すぎのようだ。

シルディは中に入ると、杖を入口の扉に向け、何かの呪文を詠唱すると

薄い緑色に光る障壁を張った。

「これで逃げれれないわ」

「よくやった、シルディ！」

「後は、お前等とっ捕まえるだけだ」

倉庫の闇に見え隠れする小さな影は、素早い動きで
中に詰まれた米俵や、樽の影に隠れる。

「隠れても無駄だよ～ん」

「苛めないから出ておいで～」

勇者Ａはそんな優しい言葉とは、裏腹に剣を力いっぱい握り締め
殺るきまんまんの笑みを浮かべている。

「プルププ（お前等、素直に投降しろ）」

「プルププ（この人は、本気だぞ！）」

プルは勇者Ａの恐怖を熟知していた。

「ファイアアロー！」

突然、黒い影が魔法の詠唱を口にし、天井に向けて炎の矢が放たれると
矢は屋根を轟音とともに、突き破り小さな穴を開けた。
穴が開いた場所からは木の屑が音を立て落ちて来る。
倉庫の中は埃煙で目を開けるのが難しい。

「今だ、逃げるぞ！」

「あい」

「ＯＫ」

その穴から黒い影は外に順番に跳び出て行く。

「くそ～、逃がしてたまるか！」

「後を追うぞ！」

勇者Ａは入口から出ようとするが、障壁が邪魔で出れない。

「・・・だから言ったのに・・」

タケシがその様子をみて、諦め口調で囁くと首を振る。

「にゃろおお」

「こうなったら・・」

「プル！お前は小さいし、素早い」

「すぐあいつ等を追え！」

勇者Ａがそう言い放ち、プルがいた辺りを見るが
姿が見えない。

「あれ・・どこいきやがった・・」

「あれ～・」

シルディも辺りを見回すが、プルの姿は見つけられないでいる。

・・・プルの奴、もうとっくに・・

タケシは屋根に空いた小さな穴から見える青空を、静かに仰いでいた。

「プルププ（こら～、まて～！）」

「おい、何か追ってくるぞ」

「なんだあいつ、弱っちそうだな・・」

チビデビル達は、後ろをちらちら見ながらも、その足を止めない。

「どうする？」

「やっちゃう？」

「いや・・・」

屋根を飛び越え、只管走りながら、話しこむチビデビル達。

「危害を加えては、怒られちゃうよ」

「とりあえず、撒くんだ」

「プルププ（こら、待たんかい！）」

プルは屋根の地面を力いっぱい蹴ると、チビデビルの一人に体当たりをした。

「うげ・・」

プルが背中にぶち当たると、チビデビルの一人が屋根の上で倒れこんだ。
プルはその上に覆いかぶさるように乗ると、力いっぱい上から押し付ける。

「プルププ（観念しろい！）」

「！？、ピムが危ない・・！」

「こうなったら、やるぞ！」

「うん、兄ちゃん！」

プルの前に残りのチビデビル２匹が、農家の桑のような武器を構えながら
駆け寄ってきた。

・・・く・・やるしかない・・

プルは覚悟を決め、体を波立たせると、戦闘態勢に入った。

プル危うし！？

勇者Ａは障壁が消えるのを待たずに、家を破壊しようとしていた。

「糞～家潰して出てやる～・・」

「マスター焦るな・・」

「そうよ、人の家なんだから！」

イライラを体に充満させながら、それをいつ爆発させてもおかしくない勇者Ａを
タケシが羽交い絞めにして、シルディが落ち着かせるようと宥める。

「ドードー・・」

「私の魔法はもう切れる頃よ」

「ほら！」

シルディがそう言うのと、ほぼ同時に緑の障壁はその色を薄めて
空気の中に消え入る。

「行くぞ～！」

「ドカ、もふ」

ドアを開け、外に勇んで飛び出た勇者Ａは、何か分厚い大きなものにぶつかった。
ケルがドアを覆うようにして、犬でいうお座りのポーズで、外で待たされていた。
待たせていた間に既に、元の姿に戻っていた。

「やっと出てきた・・」

「何かあったの？」

「おめーいたのかよ！」

「そらいるよ、シルディにここで待っててって言われてたし」

「あ・・そうだったわね・」

咄嗟に言った事だったので、すっかり忘れていたシルディ。

「よっしゃ、追うぞ！」

「うん、行こう」

勇者Ａ達はチビデビル達が飛んでいった方向へ、走り出した。

「おいらもいこっと」

その巨体を大きく波打たせ、勇者Ａ達の後を、大きな足音を発しながら付いていく。

その頃・・

「プルププ（こいつら動き早いな）」

「プルププ（中々狙いが定められない）」

「ファイアボール！」

チビデビルの一人が、魔法を詠唱すると、手に持っている桑の先から炎の球がプル目掛けて飛んでいく。

「プルププ（そんなもん、くらってたまるか！）」

プルはひょいっと楽に避けると、また地面の反動を利用して体当たりをするが、相手は高速で動いているためやはりあたらなかった。

「プルププ（こいつら、止まらないんだよな）」

「プルププ（素早く動きながら、魔法を打って来やがる）」

「プルププ（やりにくいぜ）」

「プルププ（おっと！）」

プルはまたファイアボールを体を翻し避ける。
ファイアボールの火が民家の屋根に燃え移り、黒い煙がその場から上空たかくまで、伸びていた。

「お、あそこ煙出てるぞ」

「プルが戦っているんだな」

「みんな急ごう」

「ヘイ！」

プルの応援に駆けつけるために、歩幅を大きくして走る。
そんな様子を、村の入口にある高い塔の屋根の上から眺めているものがいた。

・・・・煙が・・

・・・・困った子達だ・

「兄ちゃん！こいつ手ごわいよ！」

「魔法が全然当たらない」

「そうだよな・」

連携がとれた自分達の魔法攻撃を、いとも簡単に交すプルにチビデビルたちは動揺が隠し切れない。

「こうなったら、俺達の取っておきを使うぞ」

「ええ・・・あれ使ったら・この街消滅しちゃうよ？」

「そんなのしたら、怒られちゃうよ・・」

「仕方ないだろ、このままじゃ、どっちみち捕まっちゃうよ」

「う～ん・・」

「おめーら！」

「ほら、仲間がきちゃったよ」

勇者A達は、プルたちが戦う民家のすぐ下までやってきた。

「ええい、やけくそだ、やるぞ！」

「うう・どうなってもしらないからね・」

三人は動きを止めると、横に綺麗に並び、自分達の持っている桑を前に突き出すし、真ん中の桑に両側のチビデビルが桑を重ねる。
そして真ん中のチビデビルが魔法を詠唱し始める。

「常しえの闇に住む魔王よ、我等に刃向かう愚者を葬り去る～」

詠唱が終わりかけた、その時、突然上空から大きな声が辺りに響く。

「ノンノンノンノン！それ以上は私が許しませんよ」

「テル、ピム、リャン！」

その声に三人は体をびくつかせると、リャンは詠唱を止めた。
そして恐る恐る上空に浮遊する者に、ゆっくり目をやると言った。

「お師匠様・・！」

魔界の貴族セラフィ！

空中に浮いてる何者かは、チビデビル達のいる屋根の上へ、ふわっと舞い降りた。

羽付き帽子に、白のストライプが入ったライトブルーのジャケット、レースの胸ひだ飾りに、ピンクベースのベスト、ピンク色のショートパンツに長靴下、革靴といった容貌は
一見貴族を彷彿とさせる。ただ顔は目の鋭い狐ということもあって魔物であることは
間違いないようだ。腰には細身のレイピアと呼ばれる剣をぶら下げている。

「困りますね～…あれほど、言いましたでしょ？」

「暴力に訴えてはいけないと…」

「お師匠様…すみません、ですが…」

「ノン！良い訳は聞きませんよ」

「ですが・・・」

「・・・・ノン」

・・・　・・・・・・・

「プル（なんだこいつら、俺完全に無視して・・）」

チビデビル達と話しているその者は、周りを気にせず、只管説教をしている。
その様子をみて、勇者Ａがしびれをきらして、イライラした口調で言葉を投げかけた。

「こら～、突然出てきて、何無視してるんだよ」

「お前は何者だ・・？」

その勇者Ａの言葉にその魔物は、目を細くして、こちらを一瞥すると、
屋根の瓦を軽く片足で蹴り、勇者Ａ達のいる場所へと飛び降りた。
その狐貴族は、右手を胸に軽く当て、羽根突き帽子を左手でとると、勇者Ａたちに
会釈をして言葉を口にした。

「申し遅れました、私の名はセラフィ＝アンドリュッセ」

「魔界に住む、まぁ…貴族とでも言えばいいでしょうかね？こちらじゃ」

「魔界？貴族～～？」

勇者Ａは突然飛び込んできた、目新しい言葉に動揺している。

・・・魔界だと・・？

タケシはその言葉に敏感に反応し、セラフィの言動に注目している。

「まぁまぁ、その事は別に構わないんですが…」

「すみませんね、うちの子達が…」

「坊や、怪我は無かったですか？」

プルの方に顔を向けて、少し申し訳なさそうに言葉を静かに掛けた。

「プルプゥ（大丈夫だよ！）」

「それは良かった」

セラフィはその言葉を聞き、にっこり笑ったかと思うと、チビデビルの方を見て
手招きをした。
その呼びかけに三匹は、反応しセラフィの元へ順々に降りてきて、
後ろに並ぶ。

「実は、この子たちに、盗みをさせたのは私なんですが…」

「暴力は振るわないようにと申し付けたのに」

「こんな結果に・・」

「ええ・・あんたが盗人一味のボス？」

シルディが声を張り上げて、セラフィに指差し問いかけた。

「そういうことになりますかね？」

「なんだって〜、お前、盗人の親分のくせに」
「何でチビデビルたちに説教してるんだ？」
「ふーなんと申したらいいでしょうかね・・」
その勇者Ａの質問に、顎に手をやり、頭を前に曲げると、何か考えている様子で
無言で立ち尽くしている。
数分、辺りを静寂が包んだ後、セラフィがまた口を開いた。
「私は魔物ですが、それなりに貴族としての誇りというか」
「やり方にもポリシーがありましてね…」
「血なまぐさいことや争いは嫌いなんですよ…」
「ですが、私と言えども、こちらで生きていくには」
「それなりに食べて行かないと、死ぬしかないわけでして･･」
「村人には悪いですが、この子達を使って、泥棒をさせて頂いています」
「ですが、さっきも申したように争いは嫌いですので」
「穏便に、穏便に、ちょっとずつ・・・」
勇者Ａは初めのうちは静かに聞いていたが、だんだん、そのセラフ

ィの
言葉に矛盾をかんじ、大きな声で言葉を放った。
「おめーな～穏便だろうが、ちょっとずつだろうが」
「泥棒には変わりねーだろ？」
「この盗人が！しかも、弟子にやらせて己は高みの見物かい」
「挙句の果てに、泥棒弟子に説教までするって」
「どれだけお高く止まっているんだよ」
「お前も同じ穴の狢じゃねーか！！」
「プルププ（その通り！）」
「確かにそうよね・・」
勇者Ａの畳み掛けるような正論に、セラフィは後頭部をポンとはたくと、独り言のように
ぶつぶつ呟き始めた。
「そういえば、そうですね」
「ふむ・・なるほど・・・」
「確かにそうだ・・・」
「これは参りましたね・・」

セラフィはチビデビル達に駆け寄ると、円陣を組みヒソヒソ話し始めている。
その間、勇者A達にチラチラ目線を飛ばしてくる。

「ごほん・・」

セラフィはゆっくり立ち上がり、背をまっすぐ伸ばし、勇者A達の方へ体を向けるとまた話し始めた。

「えーっと・・今回の件は貴方達が正しいようですね」

「ですが・・私もこちらへ来て間もないわけでして・・」

「ここを去れば、食物の供給がストップしてしまいますから」

「どうしましょう？」

「はぁ～～～？」

「どうしましょうって言われてもね・・」

シルディが少し呆れ気味に一言口にした。

「とりあえず、お前は泥棒なんだから、村人に謝って来い！」

「その後警察に突き出す！」

「魔物だからってなんでもやっていいわけがない！」

「それは・・・」

セラフィは勇者Ａの言葉にたじろぎ、困惑した表情を浮かべている。

チビデビルの回想

セラフィが勇者A達に、問責されているのを黙ってみていたチビデビル達が、突然会話に分け入ってきた。

「お前等!、お師匠様を苛めるのはそのへんにしとけよ!」

「なんだ〜?」

勇者A達を強く睨み、気持ちを全面に表し唇を震わせながら更に言葉を続ける。

「この人は・・孤児になった俺達に、生き方を教えてくれた人なんだ」

「お前達・・」

「俺達が・・今生きていけるのはこの人のおかげなんだ」

その様子を見て、勇者Aは多少動揺をみせるが、正義は我にあると心で
呟くと、強い口調で言葉を挟む。

「お前達、利用されてるんだけだぞ」

「こいつからしたら、お前らは使い勝手のいい手下くらいにしか思ってないよ」

「そんなことない!」

チビデビルは勇者Ａの辛辣な言葉に、声を荒げて叫んだ。

「だから～～」

「待って！ちょっと話しきいてあげようよ」

「この子たちにも、何か理由があるのよ」

「ねぇ、あなたたち・・」

「なんでそこまでセラフィを庇うの？」

シルディはセラフィを庇う、チビデビル達の真直ぐな無垢な瞳をみて、
何かを感じ取ると、勇者Ａの叱責を遮り、宥めるように、優しく問いかけた。
チビデビル達はそんなシルディの母のような包み込むような口調に、やがて、
ぽつぽつと口を開き、過去の出来事を語り始める。

チビデビル父と母は勇者Ｂ一行に森で出くわし、襲われていた。

「グハハハハ、こいつら弱いな～」

「ぐ・・・やられる・・」

「勇者Ｂとどめよ」

「うりゃ～！」

「ぐは・・・」

「あ、あなた・・」

勇者Ｂは魔法使いＢの魔法で倒れこんだチビ父に、近付き剣を振りかざすと

止めを刺した。チビデビル達はその様子を木の陰から眺めていた。

勇者Ｂ達は倒した父親の死体の前にしゃがみこむと、持っていたバッグから、お金を巻き上げ始めた。

「おぉ、結構金もってるじゃないか」

「父上～！」

「馬鹿！・・・・今出ていったって、俺達にはどうにもできないだろ！」

涙を流し父に駆け寄ろうとしたピムを、リャンは肩を掴んで

その場に止まらせた。

「そんなこと言ったって・・」

「ブリザード！」

「キャアアアア」

チビデビル母は魔法使いＢの魔法でその場に倒れこんだ。

「母上～～～！」

それを見て、自然に母の元へ足を運ぶピムとテル
リャンも気持ちが抑えられなくなり、木陰から出て駆け寄る。

「父上～、母上～しっかりして・・」

泣きながら二人にしがみつく三人。
母が自分の体に、しがみつく小さな子供達の手のぬくもりに
朧気な意識の中、気がつくと、消え入るような声で言葉をかける。

「みんな、逃げなさい・・私達はもうだめ・・」

「逃げきって、どこかで幸せに暮らすのよ・・」

「そんな～・・死なないで・・」

母親は最後に一滴の涙が目から零れ落ちたかと思うと、静かに息を
引き取った。

「母上～～～～～！」

「なんだこいつら～？こいつらの子供か」

魔法使いBは蔑むような目で、チビデビル達を見下ろすと
勇者Bに言った。

「めんどくさいから、この子達も一緒にやっちゃお～よ」

「うむ、一緒に死んだ方が、こいつらも幸せってもんだな」

勇者Bは魔法使いの言葉に同調すると、剣を振りかぶり、リャン達に襲い掛かる。
その刹那、突然木陰から誰かの叫び声が辺りに響き渡る。

「ノン！待ちなさい！！！」

「ん？誰だ！？」

森を通り際に耳に入った子供達の悲痛な叫び声に、吸い寄せられるように近付き
木陰から見ていたセラフィが、子供達を襲う勇者B達の姿を見てたまらなくなって、姿を現した。

「その子達の命を奪うのは辞めなさい」

「もう親から、お金は巻き上げたはず」

「それ以上の殺戮は、必要ないはずですよ」

「なんだ～？お前は」

勇者B達がセラフィを睨みながら、取り囲む。

「私は争いは好みません」

「このまま、退いてもらえないでしょうか？」

静かでどこか気品のある物言いが、勇者B達の心を逆なでしたのかイライラした口調で、セラフィに汚い言葉を投げかけた。

「ぺ！魔物風情が、俺達人間に命令か？」

「お高く止まりやがって、お前も殺して、金まきあげてやるぜ！」

その言葉を聞くと、静かに目を閉じ俯く。

「そうですか・・仕方ないですね」

「襲ってくるというのなら、私は私の身を守るため、戦いましょう」

セラフィは一瞬、顔に落胆の表情を浮かべると、静かにレイピアを鞘から抜き取り、
軽く足幅を前後に開き、切っ先を回しながら、勇者B達に向けた。

「へへ～やる気になったか」

「いくぜ！」

魔法使いBが詠唱を始めると、大きな声で魔法の言葉を叫んだ。

「フレアバースト！」

頭上に太陽のような大きな火球が現れたかと思うと、セラフィ目掛けて風を周りに
纏いながら落ちていく。

・・・この威力は・・

・・・子供達が巻き込まれる。

セラフィは火球が間近まで迫ってくると、目を一瞬大きく見開き、レイピアで空中に高速で光の五芒星を描く。

「魔闘術、吸引！」

突如できた光の五芒星に、大きな火球が激しく衝撃をともなりぶち当たり
一瞬眩い光が辺りを包んだかと思うと、火球が五芒星の中に吸い込まれていく。
そして火球が完全に消え入ると、何事もなかったように静寂があたりを包む。

「なんだこれは！？」

見た事もない技を目の当たりにして、勇者B達は額に汗を欠き、明らかに動揺した表情を浮かべていた。
勇者B達は少し警戒をしながら、憤りを目に浮かべ、口汚く言葉を投げかける。

「このやろ～変な技つかって、びっくりさせやがって」

「おい、魔法使いB、一緒に攻撃するぞ」

「分かった！」

そう言葉を放つと、勇者Aは剣を振りかぶると、ジャンプし上から切りかかる。
それを援護するように、魔法使いBはファイアボールを乱射しなが

ら、セラフィににじり寄る。

「逃げ切れんぞ！」

「終りだ！！！」

「魔闘術　風神！」

それを目で捉えると、セラフィは詠唱を呟き、言葉にした。
セラフィの体を竜巻のような物凄い風が包み込み
無数のファイアボールの火球が竜巻に触れると、その姿が消し飛んだ。

「仕方ない・・」

ため息を静かにつくと、勇者B達に悲哀に満ちた眼を一瞬向け
静かに言葉を発した。

「風のレクイエム・・！」

その言葉と同時に竜巻が左右に揺れたかと思うと、無数の風の刃が
流れるように
勇者Bと魔法使いBに向かって放たれる。

「ば、ばかな・・グア・・」

「そんな・・・ぐふ・・」

カマイタチを受けた勇者B達は一瞬にして絶命した。

セラフィ流処世術

・・・・やれやれ・・また仕方ないとは言え、殺生をはたらいてしまった・・

チビデビル達はセルフィ達の激しい戦いの間に、怖くなり、木の後ろで打ち震えていた。
その姿をセルフィは見つけると、剣を鞘にしまい、静かに声をかける。

「もう、大丈夫だよ」

「彼等は死んだ」

「お前達に危害を加えるものは、誰もいない」

「出ておいで、お前達の両親を弔ってあげなさい」

透き通るような、落ち着いたその声にチビデビル達は、警戒した心が
緩みはじめると、押し込めてた感情をさらけ出し、両親の躯に涙を流しながら
走り寄る。

「母上〜・・父上〜・・・・」

「ウワ〜〜ン・・・・」

「なんで・・こんなことに・・」

「なんとか言ってよ」

「返事してよ～・・」

幼いチビデビル達には過酷すぎる突然の母と父の死。
セルフィはその姿を直視することが出来なかった。

・・・こんなに幼い子供達を残して・・
・・・さぞや両親も無念だろう・・・

「糞～・・あいつ等が・・」

「俺達がもっと強ければ・・」

「うう・・・」

三人は両親の変わり果てた姿をみて、憤りと後悔、そして自らの非力さが
心に交互に去来し、その度に口を通して悲痛な心の痛みを吐露している。

・・かわいそうに・・彼等はこれから、この過酷な大地で
幼い三人で生きていかなければならない・・

・・果たしていつまで生き残れるのか・・？

・・俺に何かしてやれる事は無いものだろうか・・

・・・・・・

泣きじゃくる末弟テル、妹ピムと違い、長兄のリャンは涙を流していなかった。
というよりは、泣けなかった。
長兄として、この二人の前で涙を見せる事は出来ない。
そんな強い意思でリャンは自分の悲しみを押し殺し、二人に強い口調で語りかけた。

「ピム、テル！いつまでも泣いてるんじゃない！」

「父や母が死んだからって、いつまでもめそめそ泣くな」

「俺達は母さんが最後に言ったように、これから三人で協力して生きていかないと」

「死んだ母さん、父さんが心配するだろ」

「さぁ、起き上がるんだ」

「うう、そうだね・・」

「やだやだやだ～・・」

父の遺体から、中々離れようとしないピム
テルは泣きじゃくりながらも、体を起こし立ち上がる。
リャンはセラフィの方を向くと、軽く会釈をすると口を開いた。

「さっきは、僕たちを助けてくれて有難うございます」

「その上、父と母の仇まで打って貰えて・・」

「いや・・いいんだ、それにお前達の仇を討つつもりでやったわけではないよ」

「すみません、あなたを私達のいざこざに巻き込んでしまって・・」

「気にするな・・」

「じゃ、僕たちは失礼します」

セラフィに深々とお辞儀すると、リャンは兄弟達に語りかけ、三人で
両親の墓穴を掘り始めた。
墓に両親を埋めると、三人は平らな石を6つ拾ってきて、墓ごとに3つずつ
重ねていく。そして手を合わせた。
まだピムはその墓を見ながら、嗚咽をもらして泣いている。
テルは黙って、その墓を眺めていた。
しばらくすると、リャンが口を開いた。

「これから、大変なこともあるだろうけど」

「俺達兄妹力をあわせて生きていこうな・・」

「うん・・・・」

「さてと・・・家に戻るか・・」

「ピム・・帰るぞ・・」

「うう・・・うん・」

兄弟達が帰ろうとしたその時、セルフィが声を掛けた。

「君達、待ちたまえ」

三人はその声を聞いて立ち止まると、ゆっくり振り返る。

「お前達これから、どうするんだ？」

「えーっと・・」

その質問に言葉を窮するリャン。

「実はな～、俺もお前達と同じような境遇でな」

「こちらへ来たものの、行く当ても目的もないんだが」

「お互い、一からやり直しっていう点で、共通してると思わないか？」

「さぁ・・」

少しその内容が難しくて、空返事をするリャン。

「お前達、俺と一緒に旅をしないか？」

突然の、セルフィの言葉に兄弟達はぼーっとして押し黙っている。

「旅？僕たちと？」

「そうだ・・」

「青空に浮かぶ雲のように、流れるままに身を任せ」

「世界を点々と一緒に流れてみないか？」

リャンは両親の墓の方を一瞥すると、またセルフィの方へ視線を送る。

「いいかもですね・・」

そしてリャンは息を呑むと、突然真面目な顔でセラフィに話しかける。

「あの～・・旅もいいですが・・」

「さっきの、貴方の戦いを見て、僕感動しました」

「あなたの圧倒的な強さ・・はっきりいって羨ましいです」

「僕もあなたみたいに強くなりたい・・」

セラフィはリャンを静かに見つめると、少し考え込んで黙っていたがやがて、抑え気味に言葉を口にした。

「君は強くなってどうするつもりだい？」

「それは、もちろん強くなって、兄弟を守りたい」

「そして、人間達に思い知らせてやりたい・」

その答えを聞くなり、ふーっと息をつくと、夕暮れの太陽の方を見ると

言葉を重ねた。

「強くなって、暴力で相手を倒したとしても」

「何れ、それはわが身に帰ってくるものだよ」

「痛みを受けた者は、その痛みを与えた者に憎悪をもって返すだけなんだよ」

「それでは、何の解決にはならないのさ」

「しかし、俺は人に痛みを与えるなとは、言わないけどね」

「できれば、お前達には痛みを与えることがあっても」

「その与え方を俺との旅で学んでほしい」

その言葉の意味を良く理解できないリャンが言葉を返した。

「どういうことですか？」

「痛みを与えることによって、相手が報復にでることが一番問題なのさ」

「それが、事態を長引かせ、泥沼へと足を引きずる原因になる」
「だから、相手に痛みだと思わせないように・・姑息に・・・与えるやり方」
「そして・・いざとなれば・・報復が報復を呼ばないように」
「立つ鳥は後を汚さずという、ことわざもあるように」
「完全ににげきるか・・・」
「もしくは、痛みを与えた者が報復に来た場合」
「一片の証拠も残さないように、報復の相手を完全に消し去るか・・」
「要は、ばれなきゃいいのさ・・」
「報復相手が何の形跡も無く消滅すれば、そこで報復は終りという事・・」
セラフィの眼に黒い影がさすと、少し不気味な笑みを浮かべている。
「まぁ、最後の話は悪魔で最終手段だよ」
「暴力は最初から使ってはいけない、最後の最後まで使わない」
「今言ったようなのは、私独自の理論だけどね」
「そんな私と旅をするのは、君達にとって未知数なわけだが」

「どうする？」

リャンは兄弟達の方を見ると、二人は少し怯えていたがやがて何かを決したように頷く。

「俺達ついていきます！」

「貴方の全てを教えてください！」

「・・・・分かった・・」

「なら付いてくるといい・・」

「有難うございます・・！」

セラフィの実力！

リャンは回想話を話し終えると、勇者Ａ達に向かって更に主張した。

「俺達はこの人との旅路でいろんなことを学んだ」

「戦い方や相手に痛みを分からせない泥棒の仕方」

「そして何より、俺達は自信がついたんだ・」

「もう、どんな場所でも生きていける自信を、この人は俺達にくれたんだよ」

「だから、お師匠様を苛めることは、絶対に許さない」

リャンの言葉にテルもピルも強く頷くと、セラフィを庇うかのように前に立ち並び、フォークを勇者Ａたちに構える。

「ふー、確かにさ～、お前達の気持ちも分からんでもないけど」

「何か間違ってるぞ」

勇者Ａは曲がったチビデビル達の正論めいたものに、斜め下から切り口をいれる。

「確かに、お前達の境遇には、同情したいところもあるよ？」

「でもさ、そのお師匠様の教えは、どうもキナ臭いよ」

「なんだと！」

勇者Ａの言葉に憤りを覚え、すごむチビデビル達。
それを気にもとめないで、話し続ける。

「まぁ、聞け・俺もお前らみたいなのと年中戦ってちゃ」

「疲れるんだよ」

「話し戻すけどな、お前達のお師匠様は、お前達に確かに自信をつけさせたかもしれない」

「けどな、お前らの自信となるものは、歪んでるんだよ」

「泥棒の良い訳にしか俺には聞こえない」

「第一全て相手に迷惑かけるのが、前提の理論なんか翳（かざ）されちゃ」

「周辺住民は迷惑もいいところだ」

「たぶん、今までも、その曲がった理論を持って、色んな悪事をやってきただろうな」

「しかも、お前らにはその自覚がないときたもんだ」

「この～言わせておけば・・・」

体を怒りで小刻みに震わせながら、にじり寄るチビデビル達。

「そうよ、貴方達間違ってるわ」

シルディが勇者Ａに同調するかのように話しに分け入る。

「プルププ（そうだ、お前らはおかしいよ！」

話しを全く聞いていなかったが、取り合えずシルディに味方するプル。

「こりゃ、だめだ、一戦交えて、教育しなおすしかないな」

勇者Ａはスラリと剣を抜くと、構える。

その様子を見て、セラフィがまた口を開いた。

「お前達、暴力はまだ使っちゃいけないよ」

「まだその前にできる事があるはず」

「え・・・？」

「さっきの話し良く思い出してみなさい」

「・・・・・・」

「あ・・そうか！？」

「分かりました、師匠！」

「分かってくれたか、ならやる事は分かるな」
身内で話しが纏まると、セラフィは立ち上がり剣を抜いた。
その姿をみて、タケシが汗をかきながら、身構える。
「お、師匠もやっと、やる気でたみたいだな」
「プル、シルディ、タケシ、えーっと・・一応ケル・！」
「みんな油断するなよ！」
「なんでおいらだけ、前に一応がつくんだよ・・」
戦力外を通知されて、微妙にやりきれないケル。
セラフィはレイピアを構えると、体にオーラを集中し始める。
（・・・な・・なんだ・・この異様な力の波動は・・）
タケシは少し怯えている。
「何かおかしいわ・・この人只者じゃない・・」
「プルププ（確かに・・すごいエネルギーを感じる・・）」
「シルディ？どうした？」
一人だけ何にも感じていない勇者Ａ
「チビデビル達よ、覚悟はいいか」
「はい！」

そうセラフィが一言呼びかけると、チビデビル達は足を力強く踏ん張った。

「魔闘術、幻影呪縛！」

セラフィがレイピアで空中に、光の五芒星を描くと
その真ん中を後ろからレイピアで突付いた。
すると、五芒星のなかから、黒い煙が物凄い勢いで出たかと思うと
辺りを暗闇に変えてしまった。

「なんだ、これは～～？」

「あれは何？」

暗闇の中で視界が通り始めると、シルディが何かを見つける。

「大きな蛇の化け物が襲ってくるわ・・」

「うわ・・ほんとだ・・しかもいっぱい・・」

「プルププ（おーい、後ろから骨ナイトの大群が・・）」

「おいおい、上空からでっかい竜が俺達みてるぞ～」

「おいら、怖いよ・・」

「キャアア・・ウワア・・」

慌てふためく勇者Ａ達を前に、タケシは落ち着き払って、様子を窺

っている。
そして声を張り上げて言葉を口にした。
「これは、幻影だ、全て存在しないものだ」
「俺達は幻相手に騒いでるだけだ・・」
黒い霧が晴れると、勇者A達はその意味がようやく分かる。
幻影は霧とともに、その姿を消していった。
「なんだったんだ・・今のは？」
「あれは奴の幻影魔法だ・」
「なに・・・ああ！！」
「あいつら・・いねぇ・・・・」
「逃げられたか・・糞～」
「今から追うか・・？」
勇者Aのその言葉にタケシが口を挟む。
「それは止めた方がいい・・」
「到底俺達のかなう相手じゃない・・」
「そうね・・まともに戦ってれば私達、負けてたわ・・」

「ええ・・」

（…魔界貴族セラフィ…とんでもない使い手だ…）

タケシは逃げてくれた事に、心底ほっとしていた。

飲みやへいく！

勇者A達はセラフィーの事、そして彼等が去り、もう来ない事を村人達に伝えると取り合えず仕事は終了したという事で、事務所に戻った。

「社長～仕事終わりました」

勇者Aが疲れた顔で報告書をシギトに渡す。

「ご苦労だったな、こちらもさっき済んだところだ」

「勇者A殿お仕事は慣れて来ましたかな？」

ソリアが勇者Aを見て言った。

「まぁな～、でもなんか・・大変ですな」

その言葉にシギトが反応し、口を挟む。

「勇者A、楽な仕事などないものだ」

「とはいえ、うちは毎回命を賭けねばいけない商売柄」

「大変なのも分かる」

「そうだ、勇者A」

「この後飲みにいかないか？」

「いいね～」

「じゃ決まりだな」

勇者Ａはタケシたちにそのことを伝えると
魔物ルームで待っててもらうよう指示した。
外に出ると、シギトが馬車の中で待っている。
運転手はソリアだ。

「じゃ、乗ってくれ」

「ういす」

勇者Ａを乗せると、行き着け飲み屋まで馬車を走らせる。
飲み屋まで来ると二人は馬車を降り、中へ入っていった。

「二名様～」

「奥の席へどうぞ～」

「なんにしましょう？」

「俺はチューハイで」

「熱燗一つお願い」

「後は～、カレイのから揚げ」

「オデン・ｅｔｃ」

勇者Ａ達は畳の席にあぐらを掻くと、料理が来るのを待っている間二人で談笑していた。

「シギト～、何か俺最近よ」

「なんだ？」

「自分が弱い気がして仕方ないんだよ」

「ふむ」

「あんまり修行してないし、下手したらタケシなんか俺より強いんじゃないかな・・」

「そうか」

シギトは少し黙っていたが、また話しを始めた。

「お前も一回修行したほうがいいかもな」

「ええ・・しかし仕事もあるし、相手もいないしな」

「そうだ、お前に特別休暇をやろう」

「そしてその間、コーヤン先生のところで修行してくるといい」

「ええ・・しかし・・」

勇者Ａはその間の給料がどうなるのか、心配している。
カツカツな生活をしてて余裕がないのだ。

「給料の事か？」

「え・・」

「大丈夫、その間、タケシとプルに頑張ってもらうから」

「その間の給料は今と同じだ」

「ほっ・・」

そこへお酒と料理を持った店員がやってきて
テーブルに並べ始める。

「以上で～」

「ごゆっくり～」

「うまそうだ」

二人はお酒をコップにいれると、テーブルの真ん中でカチあわし
飲みはじめる。旺盛な食欲で勇者Ａはばくばく食べ始める。
シギトはちびちび食べ始めた。
しばらくすると、だんだん二人はアルコールが回って
出来上がってきた。

「しかしよ～、シギト～おめーも偉くなったもんだよな～」

「ハハハ！ま～な！俺もこんなにうまくいくとは思って無かったよ」

「もういい年なんだし、嫁さんでももらったらどうだよ？」

「えぇ・そうは言うけどな～、相手がいないんだよ」

「パミヤ叔母さんが一杯お見相手の写真とかもってこねーか？」

「来るよ、毎回俺はそれをみてみぬ振りしてやり過ごしてるさ」

「なんでよ？」

「俺は見合いなんてもんで、相手探すのは性に合わないんだ」

「魔物と一緒にするつもりはないが、一緒に語り合い、行動を共にしたものとでしか」

「打ち溶け合えないんだよな・・」

「そんなこと言ったって、お前と行動共にする人間の女の子はいないだろ？」

「あ、そういや、うちの事務のフィーネちゃんとかどうよ？」

「フィーネか？あれは幼馴染だし、そういう対象になるわけ・・が」

シギトが少し酔いながらも言葉が止まる。

勇者Ａがすかさず、その様子を見て突っ込む。

「はは～ん、お前フィーネちゃん好きなんだろ？」

「な・・何を言うか・・・・」

「相変わらず奥手だな、おめーは」

「俺が恋の繋ぎ役してやろーか？」

「ちょっと待て・そんなこと・・いら・・ないからな・・」

「任せとけって～いいムード作ってやるよ」

「む・・・・」

「まぁ、そんなことより今日はパーッと飲もうや」

「そうだな・」

この後、勇者Ａたちは深夜すぎまで飲んでた。

リンの家出！？

勇者Ａはベロベロになるまで、シギトと飲み明かし家に帰ったのは朝３時だった。

「たでーま・・」

「うぇ・・」

「・・・・」

「リン、愛する夫のお帰りだよ～」

「リンちゃん～どうしたのかな～？」

勇者Ａは部屋を見渡すが、リンの姿はどこにも見当たらなかった。

「あれ・・・」

「なんだ・・これは」

テーブルの上に何か白い紙が置いてある。

勇者Ａはそれを手に取り、読み始めた。

実家に帰ります。

突然でごめんなさい。

リン

「・・・・・・」

「なに～～～～！？」

「そんな・・ば・・馬鹿な・・・」

「まさか・・・・」

勇者Ａは数ある心当たりのいくつかを頭で思い浮かべる。

（…まさか、最近、帰宅が遅くなって、ろくに相手もしてなかったせいで
そんな俺に嫌気がさして、実家に帰った・・？？）

（それとも・・・貧乏生活に耐えかねて、我慢できなくなって
俺を見捨てたとか・・？）

（後は・・フィーネやシルディが家にたまに電話かけてくるのを
聞いてたから、二人とも女だし、浮気相手と勘違いしたとか・・？）

勇者Ａは意外にまともな心当たりばかりで、堅実で愛妻家の面が窺える。
逆に言うと交友関係はそれほど広くはなかった。

「ふ～・・・心当たりはもう他にないしな～・・」

「とにかく、リンは実家に帰っているようだ・・」

「あいつの実家ってどこなんだろう・・」

実は勇者Ａはリンの実家を知らなかった。
病院で自分を親身に介護してくれたリンに惚れ、ある日突然告白した勇者Ａは
その日から何度か交際はしたものの、会話の中で家族に触れるとリンは、いつもそれをはぐらかし、話が引き出せないでいた。
それでも、リンにベタ惚れだった勇者Ａは、プロポーズをし
リンはそれを快く受けたので、とんとん拍子で結婚までこぎつけた。
結婚式は、リンの意向で、リンの友人、勇者Ａ、ご近所さんという、とても
地味なメンバーでひっそり教会で式を挙げた。
リンの様子から自分の家族や素性を知られたくないのを、薄々感じていた勇者Ａは
彼女に合わせて、自分の両親すら呼ばなかった。もちろん、両親はそれに不満たらたらだったが、勇者Ａがそれを押し切った。そういうこともあって、未だにお互いの両親に、勇者Ａもリンも会ったことは無かった。

「どうしよ～～～！」

「リン・・・」

「うぅ・・困ったなぁ・・」

まだアルコールがぬけ切れていない、ぼーっとした頭で勇者Ａは絶望という泥沼の中で、悶絶していた。

（…そうだ、こんな時こそ、冷静な考えができる・・・）

（…頼りになるアイツに相談して見よう・・・！）

勇者Aは血相掻いて玄関を飛び出し、馬車まで来ると大声を張り上げる。

「タケシ～～～～！」

「起きてくれ～～！」

タケシは自分を呼ぶ声に目を覚ますと、何が起こったのか頭で分析し始める。

（…ん…なんだ…！？）

（…勇者Aがなんか言ってるな…）

（…しかも…危機迫るような声で…）

（…こんな遅くに…？）

（何かあったのか…？）

タケシは一瞬で異常な事態を感じ取ると、体をノーマルな状態に戻し馬車のチャックを開けて、ゆっくり外へ降りていった。
プルはそんな騒がしい声にも、まるで気づく様子が無く、ぐっすり寝ている。

「どうした・・・？マスター」

「おぉ・・タケシ・・・！」

「聞いてくれ～～～！！！」

勇者Ａは酒の勢いもあるのか、タケシに抱きつくと
半べそをかきながら、リンの事、自分の事、結婚した経緯など
普段話す事が無い様なことまで、タケシに話し続ける。
一部始終を聞き終え、タケシがそれを頭でまとめると
重い口調で言葉を発した。

「むぅ・・・マスター・・・」

「今聞いたかんじでの、俺の意見を言ってみるが」

「黙って聞いてくれるか？」

「お・・・おう」

勇者Ａはタケシに全てを話し、少し頭が冷静になってくると
静かに頷いた。それを見てタケシは話しを続ける。

「俺がマスターたちのとこで、厄介になり始めて・・」

「一緒に暮らしているうちに、リンさんや、勇者Ａ、プルの事を
本等の家族のように思っていて・・」

「そんな家族の事を、それなりに理解しているつもりだ・・・」

「そして、俺はリンさんは、一生懸命頑張って仕事をしている勇
者Ａの事を・・」

「すごく大切に思っていて、勇者Ａが心当たりといって今話した
事なんかで・」

「出て行くような人じゃない事も分かっているつもりだ・・」

「そ・・そうか・・？」

勇者Ａはすがる様な目で問いかけると、タケシは優しく微笑み、静かに頷いた。

「じゃあ・・なんでリンは手紙だけ残して俺達を置いていったんだ・・？」

「それは・たぶん・・リンさんにとって、物凄く重要な用事が急に出来て」

「満足に説明する時間もなく、手紙だけ置いていくしかなかった・・・」

「そう考えるのが自然だと俺は思うんだ・・・」

「うーん・・・・」

「そういや・・・俺達携帯も今持っていないし・・」

勇者Ａとリンは最近自分達の携帯を解約し、通信費を削ってまで貯蓄に回していた。

「会社の携帯は持っているけど、俺遠出してて圏外だったし・・」

「連絡する手段なくて、手紙書くしかなかったのかもな・・」

勇者Ａは携帯を持たせなかった事を悔いている。

「で・・・リンが嫌になって家出したんじゃないのなら、用事を終えれば、すぐ帰ってくるって事か？どっしり待ってればいいのか・・？」

勇者Ａの質問に軽く頷くものの、タケシは神妙な顔で何かを考えている。

（…とはいえ…心配な事には変わりは無い…）

（…そして、俺はあの時…ヒドラとの戦いに出向いた時）

（…リンさんがクノイチの格好に変身して、戦っていた事を知っている・・）

（…その姿になったリンさんの動きは、その辺の一般の人間の女が・・）

（…できるような身のこなしでは無かった…かなり訓練された動きだ…）

（…クノイチ…と今回のリンさんの行動から推測するに…）

（…クノイチの里がリンさんの生まれ故郷であって・・）

（…その里に何かがあったと考えるのが、セオリーだと思う）

（…しかし、これを勇者Ａに話していいものだろうか・・・？）

「おい、タケシ、どうしたんだよ・・・」

「なんか、心当たりでもあるのか・？」

押し黙って考え込みながらも、時々自分をチラチラみるタケシに勇者Ａはタケシが何かを知っているような気がしてならなかった。

「むう・・・・・」

くのいちの里！

キル村のあるピリカ大陸から北東に１００ｋｍの地点にジパーングという国があった。
この国は独自の文化で発展し、他国との交渉を一切せず農業を中心に栄えてきた。
その国のある森の中に外界との接触をたち、クノイチ達がひっそり暮らす”雛菊の里”があった。
「姉様、さすが・・」
手裏剣を3つ連続で投げて、的の中心に全ての手裏剣の先がひしめき合うように刺さるのを見て
ユイは思わず感嘆の声を上げ、言葉を添えた。
「ユイ、あなたも大きくなったわね」
そうユイに声を掛けたのは、紛れも無くあの勇者Ａの妻リンであった。
「私がこの里を出て行ったとき、あなたはほんの１２歳だったかしら」
「あれから4年で随分女らしくなって・・」
リンはこの里にまだ着いたばかりだ。
クノイチの首領白菊はリンを呼ぶため、里の使いに手紙を持たせてキル村に送り
その使いから白菊の自筆の手紙を受け取り、内容を読んだリンは唖

然とした。
　代々雛菊の里のクノイチはこの一体を収める藩主、白鷺家の手となり足となり
その繁栄に尽くしてきた。その白鷺家が居を構える白鷺城からつい最近
雛菊の里へ伝令が申し渡された。
「近頃、我が城の殿の命を狙う不穏な動きがある、殿の命を守るに、現存の兵だけでは
忍びない、寄って、雛菊の里に住む最強のクノイチ５人を警護に連れてくるべし」
その伝令を見た首領白菊は、４人まで選んだものの、最後の一人が決まらず
昔この里最強と謳われながら、外界へ出て行ったリンの事を思い出し、なんとか場所を突き止め、リンに里に帰還の命をくだしたのである。

暫くすると、茅葺の屋根の家から白菊が顔を出し、リンに近寄る。

「よく帰ってきた」

「白菊様・・！」

リンとユイは素早く右膝をつき、しゃがみこむと頭を下げ、一言発した。
白菊は更に言葉を続ける。

「よい・・・楽にしなさい」

そう白菊は言うと、静かに語り始める。

「お前がいなくなって早４年・・・」

「一時は勝手にこの里を捨て出て行ったお前を」

「恨みさえしたが・・・それは一時の事・・」

「お前にも何か考えあっての事と悟り、諦めていた」

「しかし、またこうして、私の突然の伝令に答え、帰ってきてくれて、本等に嬉しいぞ」

「もったいなきお言葉・・・」

静かに目を閉じ白菊に言葉を返す。

「伝令はもう見たと思うが」

「近頃、白鷺城に不穏な動きあり・・」

「外部の仕業か、それとも内部のものか分からぬが」

「怪しき呪術と禍々しき妖怪どもを操り、殿の命を狙う不届き者がいるらしい」

「お前は、クノイチ最強の忍者として、４人を従え、城に出向いて、殿の命を守り抜き」

「殿に仇なす、敵の正体を突き止め、排除するのが今回の任務だ」

そこまで話すと、白菊は持っていた金の鐘を鳴らして大きな声で言

葉を放つ。

「我が里最強の四天王出ませい！」

黒い影が村のあちこちから出てきて、高速でリンの後ろに並ぶ。

「来たか・・」

「魔性使い、栞（しおり）」

「剣精　早乙女」

「暗器魔士　幻」

「不死人　躯」

現れた４人は独特の衣装を身に纏っている。
栞は紫の着物を着た一見遊び女のような姿
早乙女は比較的オーソドックスな侍のような袴を着ているが、その色はとても
派手な青い色で、肩に大きな青竜刀みたいなものを挿している。
幻は黒い頭まで覆うフード付きローブを着ている。
躯は血の色のような忍者スーツを着ているが、格好は一番まともなようだ。

四天王が集まると、リンを見つめて白菊が強い口調で言葉を投げかける。

「良いか、リン」

「お前はこの者達いや、クノイチ全体の代表だ」

「失敗は許されぬ」

「どんな事があっても、任務を成功させよ」

「分かったな・・・」

「はい・・・」

そう言い残すと、白菊は家の中へ去っていく。
リンは物思いに耽っていた。
（…頑張らないと・・・この任務終えて、早く勇者Ａに会いたいな・・）

その頃勇者Ａは・・・

タケシから衝撃の事実をなんとか聞きだすと、一時黙り込んだが
凛々しさを漂わす精悍な顔つきに変わると、リンを探し出し家に必ず連れて帰る事を
心に誓う。そしてシギトの携帯に電話すると、タケシとプルを必ず仕事に向かわせる事を
条件に休みを貰う。

「お前のかけがえの無い者を、必ず連れて帰ってこい」

シギトは勇者Ａにそう一言投げかける。

「任せとけ・・！」

勇者はいつになく力強く答えた。

ジパーング探索！（前書き）

なんとなしに、新しい文体に挑戦。読みにくかったら
すみません。（最後まで書き終えると、あまり変わってない事にき
づきました・・）
やっぱりみにくいので元に戻します。。

ジパーング探索！

勇者Ａはタケシとプルを馬車でシギトの事務所に連れて行った後、ジパーングから最も近い海沿いの年パーニャを目指して馬車を走らせている。その間朝のタケシ達との会話を思い浮かべていた。

「リンさんはクノイチだから・・・」馬車の後ろで胡坐を書きながら思案した物を口にするタケシ。「でも信じられないよな・あいつがクノイチとか忍者とか・・」勇者Ａは自分の嫁さんのいつもの優しいおっとりした姿を思い浮かべると、ギャップがありすぎて、しっくりこない。

「ところでよう、忍者ってどこに住んでるんだ？」その勇者Ａの当たり前に浮かび上がる

質問にタケシは押し黙っている。「プルププ（たぶん、忍者の森だよ！」全く思い浮かばないプルが適当な事を言うと、タケシがプルの頭を大きな左手のひらで、軽く叩いた。

「ほらよ、ＴＶとかで出てくるクノイチってさ、なんての、独特だよな。あぁいうのってあんまりこの辺じゃみないよな？」ＴＶに出てくるのクノイチは独特の言葉遣いと変わった着物が印象的だったのが頭に浮かぶ。「そうだ、良いこと思いついたぞ！、ＴＶ局にクノイチを何をモデルにしてるのか、聞きゃーいいんだよ」勇者Ａの言葉にタケシが目からウロコがとれたみたいな表情を浮かべて、一瞬頭を上に持ち上げる。さっそく携帯で電話番号を打ち始める勇者Ａの手が止まる。

「あ、そういや、知らんかったわ、ＴＶ局の電話番号…」タケシがそれを見て後ろから手を伸ばし、勇者Ａの携帯をひったくる。器用に太く堅い指の先で、力を調整しながら携帯を壊さないように操作し、ネットサーフィンをすると、検索サイトで『お色気くのいち』

と打つ。
すぐに画面が変わるとピンクの背景色をバックに鮮やかなサイトが映る。真ん中には
太ももをあらわにしたクノイチの姿の画像が貼り付けられていた。
「これは、すごい・・・」タケシが息を呑んでそれを凝視して固まってると、勇者Aが興味をそそられ、手綱を引くと馬車を止め後方に乗り出して覗き込む。
「おいおいおい、これなんだよ・・・エロ・・」二人が携帯を囲むように見ている。
「プルププ（俺にもみせてー」プルが近寄ってくると、タケシがその触覚を掴み持ち上げる。
「プルププ（なにすんだよ～、見せろよ！）」
「止めておけ、お前には刺激が強すぎる・・」
そうタケシは鼻を伸ばしながら顔を赤らめ言うと、地面にプルを片手で押さえつけ、HPのTV局の電話番号を携帯に打ち始める。
「あ、もしもし～○×局です」誰かが出ると、勇者Aに携帯を静かに手渡す。
「あのー勇者Aってもんです」、「は？誰？」、「えーっと誰って言われても・・」
「イタ電か・・？面倒くさいから切るぞ！」、「あぁ、ちょっと待って・・」
言葉がしどろもどろで何言っていいかパニックを起こしている勇者Aを見兼ねて、電話を奪い取りタケシが話し始める。「いや、悪戯電話じゃないんです、実はおたくの番組でクノイチのドラマ見つけまして、少々質問あってお電話しました」その丁寧な言葉に○×局の人の対応が変わると、色々話を聞きだすことに成功した。「有難う」そう丁寧に挨拶すると、タケシは静かに携帯を切る。
「タケシ、何か分かったか？」静かに頷くタケシ。
「細かい事は言わないが、どうやら、クノイチは辺境の島ジパーングというとこにいる

女忍者の村を題材にしたらしい」、「ＴＶ局が土下座して、なんとか取材の許可を得たということだ」、それを聞いた勇者Ａが地図を取り出し、ジパーングを探し始めると、縦長に伸びた
島にジパーングとだけ文字が書いてある大陸があるのを見つける。
それを見て思わず感嘆の声が漏らすと、タケシに言った。
「でかした、タケシ！なんとか島までは行けそうだよ！」その喜びを体一杯に表している
勇者Ａを見て、顔を綻ばせるタケシ。

・・・・・・

（…ジパーング・・・そこにリンがいる・・）
勇者Ａは馬車を走らせながら、いつになくシリアスな表情で、方向は分からないが
取り合えず、空を見て遠い目をしている。
今走っている馬車は岩場が多く、小岩や段差に当たるたびに、場所を大きく上下に音を立てて
揺らす。大きな岩場に差し掛かると、突然その影から黒い物体が飛び出してきた。
・・・・ドカ！！！・・・・
突然出てきた影を、減速する暇もなく、思いっきり馬車はそれにぶち当たる。
その瞬間、馬車に響く衝撃と轢いた事による心の衝撃が同時に襲ってきて思わず目を閉じ、手綱を力一杯ひいて馬車を急停止させる。
「うげ・・轢いちまったよ・・」
「どないしよ・・・」手綱を握る手を中々離さない勇者Ａ。
「このまま逃げるか・・・？」「こんな誰も周りにいない荒野なら逃げても・・・」
そうひき逃げ犯さながらの心理状態に陥り

思わず場所を走らそうとしその時・・・

突然後方から大きな声が勇者向けて投げかけられる。

「こら、まちーーや！！」、「おんどれ、人轢いといて、逃げさらすつもりか？」

その声に体を一瞬大きく震わせ、手綱を離す勇者Ａ。

勇者Ａが恐る恐る声のするほうへ体を捩り、振り向くとそこには見たこともない魔物が立っていた。

新たな仲間！

勇者Ａの前に現れた・・もとい、トンズラしようとしたとこへ、ドぎつい関西弁で
呼び止める謎の魔物。
その姿は武士のような袴を着込み、腰に刀らしき物を挿し、丸みを帯びた顔立ち
、申し訳程度に点のようにある眉毛、どこか愛嬌のある眼、そして背は勇者より低い小柄な魔物。ほぼ人間の子供のように見えるが、顔色が青色なため、魔物には違いない。

「なんだ、魔物か～」

「心配して損した…」

安堵の息を一回吐くと、馬車から飛び降り魔物の前でふんぞり返る勇者Ａ。
その態度に魔物は憤慨してか、勇者Ａの真ん前に陣取ると大きく息を吸った。

「なんじゃお前は～～！ひき逃げ犯の癖して偉い態度でかいやんかー」

「ワシさっきのでドタマかち割りそうになったんやで～！」

「どう、責任とるんやー！」

「魔物やからって馬鹿にすんなや！ちゃんと出す物出してもらうで！」

「そなやいな～・・」

魔物は言葉早にまくし立てると、電卓を袖から取り出し数字を打ち始める。

「こんなもんかいな、４０００００００キルでどうや～兄ちゃん！」

勇者Ａは初めは逃げようとした事もあって、黙って聞いていたがだんだん顔つきが鬼の形相に変わっていった。鞘から剣を抜き取ると魔物に切っ先を構えて地の底から聞こえるような低い声で、話し始める。

「お前な～・・・こんな荒野で・・ひき逃げしたからって・・」

「誰も見てないんだよ、しかもお前は魔物・・・」

「普通に倒しちまえば、全て丸く収まるんだよ～・・ウフフ」

勇者Ａの目に黒い影が差すと、異様な殺気が体からあふれ出ている。

「お！お！お前！ひき逃げ犯の癖に開き直ったあげく、実力行使かい！」

「あんまりワテあまぁみんといてや！」

魔物も剣を抜くと、背が足りない分を体を少し空中に浮かせて、勇者の目線に合わせて

睨み構えを取る。

（…なんだこいつ…空中浮いてるぞ…羽も無いくせに…魔法か何かか？）

次の瞬間、その魔物が浮いたまま真直ぐ空中を滑るように、勇者目掛けて高速で切りかかってきた。

「は・はやい・・！」

…ドガガガガガ

ものすごい剣の連続攻撃、勇者Ａは防御で手一杯だ。
しかし勇者Ａも負けていなかった。すぐさまその一つの剣撃を見切って体を左に捻って
交わすと、次は自分の攻撃とばかりに、剣を振り下ろす。

「やるな・・・兄ちゃん・・・」

（ちょいとやばいで・・こいつ強いやんか…）

「とどめだ～！！」

魔物が足元の石につまづいて、後ろのこけた瞬間、勇者Ａの目がキラリと光り
地を蹴って浮き上がると、剣の柄を両腕で握り、仰向けで倒れている魔物目掛けて
剣の切っ先で突き刺そうとする。

「うわ、うわ、ちょお、まちいや！！」

「く・・・」

魔物の体に剣が届く瞬間、魔物が眼を細めたかと思うと、突然姿が地から消えた。

勇者Ａの剣は魔物ではなく、岩の地面に突き刺さり、差し込んだ前方に亀裂が走る。

勇者の少し後ろに一瞬でその姿を移動させた魔物。

「あぶね～…この兄ちゃん強いわ」

「このやろ、すばしっこいなぁ・・」

どちらも剣をまた構えるが、両者とも少し恐れ始めている。

（…こいつ、一見弱そうだけど、動きも早いし変な技も持ってるし、侮れねぇ・・）

勇者Ａがまた攻撃に転じようと踏み込むんだ瞬間・・突然魔物が剣を捨て土下座をし始めた。

「かんにんやー！ちょっとした出来心やったんや～・・・！」

「金無かったもんやから、あんた馬車でくるの見えたんで」

「わざと馬車に飛び込んで、賠償や～って金巻き上げようとしただけなんや！」

「ほんの出来心なんや、許してや～！」

勇者Ａの前で土下座して涙を流しながら、本当のことを告げて、許しを請う魔物を見ているうちに、なんだか馬鹿馬鹿しくなってくると、剣を鞘にしまう。
そして、自分に非がないと分かると、上から目線で話し始める。

「お前な～、それヤクザと同じだぞ」

「当たりやっていうんじゃ」

「人間社会じゃ立派な犯罪だ、お前の母ちゃんも泣いてるぞ」

「クドクド～・・」

勇者Ａが長い長い蘊蓄をクドクド語り始めると止まらない。
しばらくして、言いたいことを全部言ってしまうと、馬車に飛び乗る勇者Ａ。

「まぁ、俺も旅を急ぐ身、この辺で許してやるわ」

「じゃあな！」

「待ってや！」

くどくど言われて塞ぎ込んでたかと思うと、突然立ち上がり勇者Ａを大声で呼び止める。

「ワテ、あんさん気に入ったわ」

「ワテみたいな奴にくどくど説教してくれるなんて」

「優しい証拠やで」

「どや、仲間にいれてくれへんか」

「それなりに働きまっせ！」

その申し出にしばらく考え込む勇者Ａ、しかし今はプルもタケシもいなくて
一人旅。そして未知への大陸へ行くと、どんな強い魔物が出てくるかも分からない。
そして何より、この魔物が結構強い事もあって、その言葉は有難かった。

「しゃーないな・・・じゃ、後ろに乗りな」

「へい！」

「だけどな～、俺の仲間になったんだから、しっかり働いてもらうぞ！」

「わかりやしたー！」

（…取り合えず、ここは下手に出ておいて、この兄ちゃんに着いていけば、飯にありつけそうやし…損はないやろ…）

「取り合えず名前だけ聞いとくかな」

「ワテでっか？ワテはシマジロウいいます」

「じゃジロウでいいな」

「へい！なんでも結構っす」

ちょっと変わった魔物を新たに仲間にした勇者A。

思惑はそれぞれだが、馬車は二人を乗せ港町パーニャを目指し、荒野を駆け抜けていく。

特訓！

リンはクノイチの代表に指名され、刺激を得たのか気合を体全面に押し出し
これからどうしようか考えていた。

（…私はクノイチの代表として、頑張らないと）

（…白菊様が期待してくださってるんだもん、応えなきゃね・・）

（…四天王のあの子達取り合えず集めるかな・・）

リンは四天王に召集をかけると、いつもの優しい表情とは違い
気合の入った鋭い目つきに変わっていた。

「てめーら、良く集まったな」

「今日からお前達を取り仕切る事になったリンだ」

「初めに言っとくけど」

「お前達の生殺与奪の権限は全てあたいにある」

「私の言うことは絶対だ」

「わかったな！」

四天王はお互いを見回しきょろきょろしていた。
初めのイメージとまるっきり違うリンの姿に動揺していた。

ぼそぼそリンに聞こえない程度に話す四天王達。

「おい、栞・・・」

「何かこの人怖いよ・・・？」

幻は黒いローブから青ざめた顔を覗かし言った。

「そう・・？これくらいじゃなきゃだめでしょ！なんたって私達の将だよ」

「それにしても美人よね・・惚れそう・・」

栞は整った美しい顔に凛々しさを漂わすリンをみて、少しホの字のようだ。

「ふ・・どうせ、すぐメッキ剥がれるよ・・」

そう上から目線で強きな発言をしたのは、この四天王で姉御的存在の早乙女だ。

「なぁ躯はどう思う？」

「・・・・・・さぁ・・」

「とりあえず・・・・眠い・・」

「相変わらず、躯はマイペースだね・・」

躯は眠気が襲ってきていて、ふらふらしながらも、なんとか意識を

繋ぎとめ
リンの話しを面倒くさそうに頭に詰め込んでいる。
「さてと、話しはこれくらいにして、そろそろ特訓に入ろうか」
恐る恐るリンに問いかける幻。
「リン様、何をするおつもりで・・？」
「取り合えず、うさぎ跳び１００ｋｍ、腕立て伏せ１００００回、遠泳３０ｋｍいこっか！」
「「・・・・」」
「じゃとりかかれ！！」
「「はい・・」」
四天王の一部は血反吐吐きながら、森の小道をよたよた兎跳びをしながら何周もこなす。
「しぬ～・・・」
弱音を吐いているのは一番体力に自信のない幻。
「早乙女ねーさん、大丈夫・・？」
「う、うっさい！はなし・・かけるな・・」
早乙女は暑苦しい袴を捲くりあげ、太ももを顕にしている。

顔からは汗が吹き出て、今にも動きを止めそうになるが、姉御としては
先に音をあげるわけにはいかなかった。
「ははは、楽しいね！なんか中学校のときの部活思い出すわ～！」
能天気に余裕を見せながら、明るい顔に汗がまぶしく光る栞。
「みんなどうしたん・・そんな汗流してさ・・」
「どうしたって、躯・・・・」
幻が躯をみるが、全く顔から汗が流れていないばかりか、息すら切っていなかった。
（…この子、人間やろか・・・）
幻は常日ごろから躯の魔物説を暗に唱えていた。
どんな時でも疲れを見せず、刀できられた次の日もしらっとした顔で現れて、普通に動けていたからだ。
その後も四天王の地獄の特訓は続いていた。
その頃勇者Ａは・・・
「なぁ、お前この辺に住み着く魔物か？」
「さぁ、分からないっす」

「何で分からないんだ？」

「それが・・気がついたら～この岩場の前に倒れてて」

「全くそれまでの記憶ないんっすよ」

馬車中で肩肘突いて寝転びながら、次郎は天井を呆けたかんじで見つめている。

「おめーそれたぶん、記憶喪失って言うんだよ」

「はーそないなりますかね～」

「お、港見えてきたぞ！」

それを聞いて次郎は跳ね起きると、勇者の隣に飛び乗ってきた。

「おーー街～～～！！グレイト～！！」

「飯～～～！水！女～～～！！」

それを聞いた勇者Ａが目を細めて次郎を見て言った。

「女っておめー・・・子供みたいな格好して興味あるんか？」

「いや、わてこう見えても、もう人間で言えば青年でっせ！」

「は～ん！」

疑いの目を向けながらも、勇者は正直どうでもよかった。

「取り合えず、主人の俺に恥かかすような事はすんなよ！」

「わかってますがな～！」

次郎の口から涎が垂れている。息は少し荒く目は大きく見開かれ、こめかみに十字の皺が浮かび上がっていた。

（こいつに鏡見せてやった方がいいかな・・・）

くのいち動く！

1週間後・・・

城に出向く予定が明日なので、本日夜、リン達は村を出ることになっていた。
旅の準備を整え、村の真ん中にある広場へと集まる。
そこには村に住む他のクノイチが、リンと四天王たちを囲むように陣取り
リンの前には白菊が厳しい表情で佇んでいた。

「お前達に言うことはもう何もない・・」

「各々の責務全うして来るが良い・」

長い話を抜きにして、短く白菊が語った。
それはリンや四天王たちへ、絶大な信を置いている証拠でもある。
話しが終わると、周りを囲んでいたクノイチ達が移動し始め、人間の道を作るべく
出口へ続く道の両側に隙間無く立ち並んでいく。
その間を颯爽と忍者特有の素早く音を立てない走り方で、リンを先頭にクノイチ代表は
駆け抜けていく。出口を潜ると、一瞬のうちにその姿を森の中へ溶け込ませ消えていった。

視界の悪い夜の森を、木の枝を伝い倒木を飛び越え、木々を素早く避けながらも

吹き抜ける一塵の風のような速さで、移動するクノイチ一向。
彼女達はそんな壮絶な体捌きを、無意識に繰り出せるほどレベルの高いクノイチ達だ。

「しかし、真っ暗やなぁ・・」

栞は着物から繋がる長い帯を、木に巻きつかせながら移動していた。
その間、周りの仲間へ絶え間なく言葉を投げ続けている。

「リンさん、ちょっと早すぎやで・・」

リンは比較的オーソドックスな動きで、地を離れることなく
素早い動きで木々を避け走り続けていた。四天王の一部はそのリン
についていくのが
やっとのようだ。

「ふん、じゃペース落とすか？」

後を付いてくる四天王たちの方を振り向き、リンは語りかける。

「その必要はないですよ」

リンのすぐ後ろを、ぴったり付いて走る早乙女が、袴を風に靡かせ
ながら
凛々しい表情を浮かべ静かに言葉を発した。

「全然・・平気・・・」

躯は両手両足で地を蹴り、犬のように森の暗い道なき道を奔る。
その姿は一向の中でも、郡を抜いた異様さを醸し出していた。

「な・に・が・平気やねん！！！」

「あんた等にあわせとったら、体もたんわ！」

幻の息は既に荒く搾り出すように、息を吸う合間に早口で語る。

「じゃ、休もうか」

リンはそう言うと、突然足を止めた。
その止まった場所に生えている木々や雑草が微かに揺れる。
周りのある倒木や、雑草が茂る地面に静かに腰を落とす四天王たち。
その静寂の中、幻の息を切る音だけが辺りを包む。

「ねぇねぇ、リンさん」

「これみてよ！」

幻が息を整えると、リンに這い寄り人なつっこい口調で語りかけてきた。

「ほら」

懐から何か金属のような物を取り出して、手のひらにそれを載せるとリンに見せる。

「これ綺麗でしょ・・」

銀色の月のような形をした物に金属の鎖が繋がれている。
どうやら、首から提げるペンダントのようだ。

「綺麗ね・・それどうしたの？」

リンの素朴な質問に、栞は微笑みを浮かべながら少し間を置くもののすぐに衝動を押さえ切れないかんじで、口を開いた。

「殿様から頂いたんだ・・へへ」

「ふーん・・」

そう照れ臭そうに言うと、顔を赤らめながら黒いローブの中に顔を潜める幻。

「それね～、幻の宝物なんだよ！」

その様子を見ながら、快活な表情で言葉を付け加える栞。

「うん・・」

「私が持っている物でも、一番大切なものだよ」

ペンダントを静かに見つめながら、幻は何か物思いに耽っている。

「殿様格好いいもんね！」

「・・・・・・」

栞のその言葉に、無言で頷く幻。

実は城に住む殿様は、この辺り一体で噂されるほどの美男子であった。

「でも格好いいだけじゃないんだよ」

「優しくて強く・・男気があって・・」

殿様の話しになると、思いが言葉を透して川のように流れ出てくる。

「男なんか何がいいのかね・・ふん・・」

その様子をずっと横目でみていた早乙女が一言発した。

リンはそのやり取りをみているうちに、家に残してきた勇者Aを思い出していた。

（…今頃勇者Aどうしてるかしら・・急いでたから禄に連絡もできずに飛び出してきてしまって…慌ててるだろうな～…任務早く終わらせて帰らないと・・）

リンは四天王たちに曖昧に視線を流していくと、なぜか一人いない事に気づく。

その事実に我に帰ると、すこし慌てた素振りで、大きな声をあげた。

「躯はどこいった！」

一際大きな声に、リンの方に一斉に視線を送る四天王たち。

「あぁ、あいつ・・また・・」

「ん・・何か心当たりあるのか？」

幻が思い当たって発した言葉に問いかける。

「躯って・・ちょっと変わっていましてね・・」

「なんていうか・・獣というか・・」

「野獣なんですよあいつ・」

「だから今頃・・」

「でもすぐ戻ってきますよ・」

幻が静かにペンダントを眺めながら、慣れた様子で言葉を連ねた。

その頃躯は・・・

「丸焼き～丸焼き～！」

「うまいーー！」

山で見つけて狩った猪を、足と手をしばり木に吊るして、炎であぶった後

肉を短剣で切り取り、美味しそうに食していた。

打ち出の小槌！

二人を乗せた馬車は港町パーニャにやってきた。
大きな白い石が詰まれた真ん中を楕円状に切り裂いたような入口。
そこを抜けると等間隔に整頓された石畳の道が続く。
この街は入口から海へなだらかな傾斜を伴う道が一本伸びており
傾斜の上方から海を見下ろす事ができる。道の両側にはやはり
大きな白い石を積んで建てた石の家がいくつも見える。

「海きれいだな」

「よしどっかで飯にするか」

「カニのマークの看板がありまっせ」

「よしそこに入ろう」

勇者Ａは坂道なので馬車の車輪に転がり防止用の石を挟んでいた。

「よし、こんなもんか」

「ジロウ、行くぞ」

「あれ・・どこ行った」

勇者Ａが周りを見渡すと、少し遠くにジロウの青い袴が薄っすら見
える。

その隣に白いワンピースの女の子が立っている。

「え～、私用事あるし、困る～」

「こんな鄙びた港町で一生を終えるのかい・？」

「あなたほどの美人は、あちこち旅をして女を磨くべきだ」

「この街で潮風に晒されながら、干からびていくのは、あまりにもったいない・・」

「さぁ勇気を出して、僕についてきてごらん、大丈夫お金なら沢山あるから」

「で、でも～・・」

「僕が最初の一歩を君の手を引っ張り導いてあげよう」

「ちょっと、やめてってば」

ドカ！

勇者Ａは後ろからジロウの頭を思いっきり小突いた。

「いて～～～！！」

「見あたらねーと思ったら、こんなとこいやがったか」

「じゃ私はこれで」

「あ～あ・・・まってや～・・・」
女の子は白いワンピースを翻し、小走りで去っていった。
「勇者Aはん、殺生やで～、もう少しだったのに」
「むさ苦しい男だけのパーティに、花を添えようとしたワテの気持ちわかってーや」
「おまえなー・・ちょっとは自分の容姿考えた方がいいぞ」
「あんな、歯が浮くセリフをそんな子供みたいな格好で言っても効果あるかよ」
「しかも顔が青い子供なんか、気持ち悪いだけだぞ」
「そうかいなーじゃこれでどうかな」
ジロウは良く分からない魔法を唱えると、体が光り輝く。
「なんだ～眩しい・・」
「これでどーかなー？」
「うは！」
勇者Aが目を開けると、これまで見たことないような、渋い男が立っていた。
褐色の髪の毛をオールバックにし、高級そうなスーツ上下に黒い革靴
鼻の下には横に綺麗に整えられたヒゲが伸びている。

中年で金持ってそうな渋い親父と言った所か。

「お前…誰だよ」

「ジロウですがな」

「化けれるのか？」

「変身は得意技でっせ」

「ほほぉ・・・」

勇者Ａはシルディやケルなどの変身を見てきたが
ここまで見事な変身を見たのは初めてだった。

「お前、俺に化けれるか？」

「もちろん！」

「どですか～？」

「おお、ばっちりじゃねーか、どこの貴族が立ってるのかと思ったぜ」

「…　…」

・・・こいつは使える、あんなことやこんなことに…ウフフ

勇者Ａは不気味な微笑みを浮かべ、ジロウを見つめていた。

「よし、取り合えず飯でも食うか」

「へい♪」

勇者Ａ達はさっき目をつけた店にやってきた。
石造りの外見と違い、中は木の床に、木板を連ねた壁、木製の丸いテーブルが奥まで
三つほどあり、落ち着いたかんじのレストランだった。
二人は席につくと、メニュー表を開いた。

「うまそうだな～」

「俺は海の幸コースＡにしよう」

「お前は？」

「ワテはステーキで」

「お前ちょっとは遠慮しろよな、そんなに金ねーんだからさ」

勇者Ａはお金をあまり持っていなかった。
それを聞いて、ジロウはふと何か思い付くと
少し罰の悪そうな表情を浮かべたが、何か決心したらしく
懐から葉っぱのような物を出し、目を閉じて何かを呟いている。

「ほいきた～」

そうジロウが言うと、手のひらの葉っぱが札束に変わった。
勇者Ａはそれを見て目を大きくして、ジロウに問いかける。

「お前・・それ魔法か？」

「しーー！」

二人は顔を寄せぼそぼそ話し始めた。

「勇者Ａはん、本等はこれ禁じ手なんやで・・でもワテもええもん食いたいねん」

「おい、大丈夫なんか・・ばれへんやろな・・」

「その辺は大丈夫、ワテの魔法はしょぼい変化魔法とは違い」

「変えた物は全部本物でっせ・・・」

「すげーじゃねーか、何でお前今までそんなん使わなかったんだよ・・」

「あんな当たり屋みたいな真似してまで金取らなくていいじゃねーか・・」

「いや、なんていうか、働きもせず、悪いじゃないでっか・・」

「いや・・当たり屋の方がまずいと思うぞ・・」

ジロウは微妙にずれた正義感みたいなものを持っていた。

勇者Ａはもうジロウの虜だ。貧乏に喘いで今まで苦労を重ねてきたがこのジロウを仲間にした事で、全てが変わる。そんな喜びで打ち震えていた。

・・・こいつは、もう離さねぇ・・もう俺の財布、いや、打ち出の小槌だ。

ジロウの背中をバンバン叩きながら、強欲な微笑みを浮かべる勇者A。

「まぁ、そういうことなら、旨いの頼めよ！」

「これから仲よくしような！ジロウ」

くのいち到着。

「着いたわ…」

5人はそれぞれ、森の途切れる手前の木々の高い場所に陣取り
前方に広がる平原、そしてその先に見える城下町と思しき
建物群の影を視界に捉えていた。建物群の中に一際高く聳えるお城の姿。
それはまさしく、白鷺城であった。

「みんな、今から町に入るけど、目立ちたくないので」

「各々、脇道や、屋根を伝って城門まで走ってちょうだい」

リンのその言葉に栞が目を丸くして言った。

「リン様、それはおかしいよ」

「そんな事しなくても、あたいらが、町娘の姿に変身すればいいと思いますよ」

「ま、早乙女ねーさんはそのまんまでもいけそうね、もちろん私も」

「リンさんと、躯はもろ忍者スーツだし、幻は怪しすぎるし」

「三人が変われば問題ないかな」

それを聞いて、幻がローブの中から栞を睨みつけ言葉を放つ。

「この格好のどこが怪しいっていうの？」
「ふん、まんま、怪しいだろ」
早乙女は率直な意見を述べ、幻を一蹴した。
「しかし、３人分の着物がないわね」
「どうしようか？」
栞が少し困ったような表情をして、頬に右手のひらを当てて頭を傾げていると
躯が陽気に大きな声で言った。
「そんなん、町娘から奪っちゃえばいい」
「馬鹿！私たちは忍者だけど、泥棒じゃないのよ」
リンは躯に強い口調で言うと、躯は後ずさり早乙女の後ろに隠れた。
「ふん、結局面倒じゃない、リン様の言ったとおり行こうじゃないか」
「あーあ、これだけ話広げて結局それかい！」
早乙女にすかさず突っ込みをいれる栞。
話しが戻ると、リンを先頭にクノイチが動きはじめた。
森と違って障害物の少ない平原を走るスピードは、影も残さないくらい

早く、あっという間に城下町の入口へと着いた。

「よし、屋根伝うよ」

リンの号令と共に、屋根に驚異的なジャンプで次々上っていく、屋根から屋根へと伝い、あっという間に一向は城門に辿り着く事が出来た。

城門には門番が二人いて、槍を片手に持っている。

クノイチ達に気づくと、近寄ってきた。

「雛菊の里のクノイチだな」

「良くぞ参った」

「殿が中で首を長くしてお待ちになられています」

リンは白菊の封を渡すと、中へと足を踏み入れて行った。

「よう、参ったな、みなさん」

「待っていましたよ」

殿の御前で正座し、深々と体を折り曲げるクノイチ一向。

「もっと気楽にしてください」

「顔をあげてくださいな」

殿は優しい表情を浮かべ、5人に向って言葉を掛けた。

リンは顔を上げると、殿に言った。

「お殿様、クノイチの代表リンと申します」
「おぉ、あなたがクノイチ最強の忍者リンですか」
「はい」
「お美しい！」
幻は後ろで殿様のその言葉を聞いて、少し不機嫌そうな顔で下を向いた。
「ところで、殿を狙う敵の事ですが…」
リンがそう切り出すと、殿は良く分からないといった表情でしばらく口を半開きにしていた。
その表情に唖然としたリンは白菊から聞いた話を殿に伝えた。
暫くして、殿が口を開く。
「そんな事聞いたこともないですよ」
「私は今日はクノイチ一向の方々が遊びに来るという話で」
「それを楽しみに待っていただけです」
後ろの四天王たちは目を大きく見開き、視線を殿に向け体を硬直させていた。
突然、殿の後ろにいた補佐役の大臣が笑い出した。
「アハハハハ！そう、この城には敵など来ませんよ」

「私が嘘の書を送って、貴方達をここに呼んだんです」
リンは状況が良く把握できなかったため、大臣に詳細を聞き始める。
「どういうことですか？」
「実はな、殿様はそろそろいい年だし、嫁を迎えたいと思っていてな」
「ワシは隣の藩の姫などいいんじゃないかと、お薦めをしたのじゃが」
「殿が聞き入れてくれんのじゃ」
殿はその間、顔を少し赤らめながらセンスを顔の辺りに翳し、静かに聞いていた。
「で、ワシがその拒む理由を聞いてみたら…」
「なんと、クノイチから嫁を選びたいと申されてな」
「そこで、君たちに嫁候補としてきてもらったのじゃ！」
リンも四天王も完全にあっけに取られ、目を丸くして固まってしまった。

それぞれの想い。

リン達は暫く固まっていたが、突然、四天王の一人幻が顔を殿に向け言葉を発した。

「お殿様、私、幻言います」

フードを後方に払いその素顔を明るみにだす。
輝くような白い肌、エメラルド色の大きな瞳、薄い紫の髪は長くローブの隙間へ垂らしこんでいた。

「私、ぜひお殿様と……、その～添い遂げたく存じます…」

リンと他の四天王たちが目を丸くして驚き、仲間と顔を見合わせてきょろきょろし始める。

「幻殿……真か？」

「はい……」

突発的な展開に驚きを隠せない周囲の人々。
それを全く意に介せず、二人は見詰め合う。

「お殿様……」

熱い視線を交わす二人の姿を、拳を握り訝しく見つめている者がいた。

――ちょっと、ずるい！　何よ、急に……

「お似合いやな～、幻」

栞は幻とお殿様を見て、にこやかに微笑み二人の仲を促すように言った。

「おぉ、お似合いの二人じゃ、殿良かったですな」

「ははは、爺気が早いな！　まだ決まったわけじゃないぞ」

そう言いながらもほぼ、心の内は決まったらしく幻の顔に、殿は頬を赤らめ
熱い視線を送っていた。

「何を仰います、もうお心はお決まりでしょう！」

大臣の押しの強い言葉に本音を隠しきれなくなり頷く殿。

「さぁさぁ、お二人もっと寄って寄って～ハハハ～」

リンはその浮かれた様子を見ているうちに、戦いに備えて張り詰めていた気が一気に抜け落ち、ぼーっと二人の姿を眺めていた。

――…私何しに来たのかしら、まぁ……でも幻幸せそう……

「さぁ、そうと決まったら婚礼の儀式じゃ～……」

その一声で家来達が宴の準備をし始める。

「みなさん、じゃ少し準備が出来るまであちらのお部屋で」
給仕の女がリン達を隣の大広間へと案内する。
大広間に集まったリン達は話を始めた。
「幻良かったな～」
「うん、栞姉さん、さっきの一押し有りがたかったわ～ありがとー」
「なーに、幻は私の妹みたいなもんだし、当然よ」
栞は幻に快活な調子で言葉をかけると、優しい瞳で上から見下ろした。
「栞姉さん……」
「たまにはお城きてね……」
「もちろんよ！」
「うふふふ～」
二人の間でお花畑が周りにあるかのような雰囲気を作り出していた。
――このままでは……そんな事は許せないわ…。
「敵襲、敵襲！」
突然、大きな男の野太い声が城内に響き渡る。

「何事じゃ……？」
「大臣様、怪しい二人が城の門を突破しました、一方は魔物でございます」
「なんじゃと！？」
それを聞いた大臣が、急に表情を強張らせた。
「どういうことじゃ……」
「この大切な時に…皆の者に、そやつらを取り押さえろ」
「抵抗するようなら殺しても良い！　」
「はい！」
家来はそれを聞くと城内を駆け巡り、大臣の伝令を広めて回った。
「なんか、ややこしいことになったわね」
リンは厳しい表情を浮かべ、四天王たちに言った。
そして、四天王たちを呼び寄せ語り始める。
「曲者を捕らえに行くわよ」
「はい」
「幻、あなたはここに残りなさい」

「ええ……」

リンは幻に顔を向け、真剣な表情で諭すように言葉を連ねる。

「あなたはもう、クノイチじゃないわ」

「この城で殿と一緒に幸せに暮らし」

「この城下町を見守っていく義務があるの」

「リンさん…」

その力強いがどこか温かみのある言葉に、胸打たれ幻は目に涙をためている。

「ほらほら、泣かないの」

「これからお嫁に行こうって子がそんな顔してちゃ駄目よ」

栞は白い布を懐から出すと、幻の涙を拭ってやった。

「よし、みんな行くぞ！」

リンは四天王達に向けて強い口調で言うと、幻以外の四天王を引きつれ城内の慌しい場所へ駆けていった。

◆◇◇◆

その頃……城内で曲者は家来達に追いまわされていた。

「勇者Aはん、何で私ら追いまわされてるんや～」

「馬鹿、お前が城には綺麗なベッピンさんいるからとかいって」

「理性なくして突っ込んでいったあげく、手当たり次第女に擦り寄るからだろうがー」

「せやかて、ほんまいたんだもん、ベッピンの姉ちゃん、てんこ盛りでっせ」

勇者A達はパーニャ港から無事船を借りて、ジパングに到着していた。

何日も歩いて腹がよじれるくらい空いてくると、ジロウの神経が究極までに研ぎ澄まされ

この城下町を嗅ぎつけたのであった。

――糞ーこのエロガキジロウ追いかけていったら、偉い事になってしまった…。

しかし、こいつは俺の打ち出の小槌だ。

絶対失うわけにはいかねぇ。

必ずやリンを見つけた後、家に持ち帰って金銀財宝出させまくるんだ。

こいつは死守するぞ！！　――

最終話　いつかまた！

「勇者A！」

「その声はリン！」

勇者Aは思いがけない場所で忍者スーツのリンと再会した。
その姿を見られ、思わず早乙女の後ろに隠れる。

――しまった、この格好見られた……。

「こんなとこにいたのか」

「リン、迎えに来たぞ！」

勇者Aは家来に追いかけられながらもリンに声を掛ける。

「勇者A……」

「リン様お知り合いですか？」

「私の夫なの」

「ええ～～～！！」

口を開けて大きな声で驚く四天王たち。

「勇者Aはん～」

「もう、ワテ疲れた、外へ逃げましょう～」
「そうだな、そろそろ潮時だな」
「リン、ほら帰るぞ」
勇者Ａは走りながらリンに向って手を差し出す。
「勇者Ａ……」
その手を掴むと、二人で城外へ猛烈なダッシュで逃げていった。
「うぇ、勇者Ａはん、早すぎでっせ、まってやー」
四天王は目を丸くしてその様子を見ていた。
「あーあ、私らのボスが行ってしもうたわ」
「でもまぁ、良かったじゃん、夫が迎えに来てくれて」
「だね、リンさん幸せそうな顔してた」
幻はそう言うと、頭に殿の事を思い浮かべて、自分もあの夫婦みたいな仲の良い関係を築き上げたいと暗に思った。
「さて、幻の婚礼儀式終ってないじゃない」
「みんな続きやろうー」
四天王たちにそう栞は促すと、元いた部屋にみんなで戻っていっ

た。
殿と幻は家来や四天王が見守る中、婚礼の儀式を行う。
「やめるときも～～～も誓いますか？」
神父がそう二人に問いかけると、二人は誓いの言葉を述べ熱いキスを交わした。
――ふ…私の入る隙間はないみたいだな
こうして、クノイチ達と城の人々はその日宴を堪能した。
その後、幻はこの城の主の妻として末永く城下町を見守りながら殿と仲よく暮らした。
――一方勇者A達は……
「おらー、岩いっぱいもってきたぞ」
「ジロウ、全部金塊にしろ」
「そんなにーーいくらなんでも魔力もちませんわ」
「死んでしまう～～～」
ジロウは死ぬほどこき使われていた。
「プルププ（頑張れ、ジロウ！）」
「お前に俺達の命運がかかっている」

「お金～ほしいわ、頑張れジロウちゃん」

「ジロウ、俺達をブルジョアにしてくれ！」

みんなに気合のこもった要求を一方的に言われ
涙目のジロウは頭の中で何かがはじけると、物凄い勢いでそこから逃げ出した。

「わ、逃げたぞ～追え～」

タケシとプルが追い回すが、ジロウが奔りながら何かを詠唱し始める。

「もう限界やー、みなさんさいならー」

急にジロウは体の周りが煌くとその姿を瞬時にみんなの視界から失わせる。

「なんだーー」

「テレポートの類の魔法だな」

「糞～逃げられた～俺の金ズル～」

肩を落とし絶叫する勇者Ａ。

「いいじゃない、お金なんてなくても……」

リンは勇者Ａに歩み寄ると、肩に手を掛け諭した。

「でも～」

「まぁ悪銭身につかずってとこだな」

タケシが一言空を見ながら締めくくった。

◆◇◇◆

――次の日の朝。

「勇者A～、いってらっしゃーい」

「行って来るよ……」

「そんな落ち込まないで」

「落ち込むよ～……」

「ブルジョア生活が夢と消えたんだぞ」

「良いのよ、そんなものは」

勇者Aを優しく見つめ、踵を浮かし頬にキスをする。

「まぁ、そうだな、俺ならすぐ稼げるし」

「時間はちょいかかるけど、そのうち大きな家も立ててやるぞ、ハハハ！」

「頑張って！　勇者A」

「おら、タケシプルいくぞ～」

「「へい！らじゃー」」

こうして勇者A達の仕事と冒険？はこれからも続くのであるがまだ様々な謎はこの世界には残されていた。しかし彼等ならこれから訪れる苦難も乗り越えていくだろう。その時の話はまたいつか！

ＥＮＤ

最終話　いつかまた！（後書き）

とりあえず最終回となります。
長い間読んで頂き有難うございましたー！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6348e/

悪者たちのぶつくさ３　続編　改！

2010年10月28日06時29分発行